

諂ひ服せん汝はかれらの高處を踐ん

第三章

斯てモーセ、モアブの平野よりネボ山にのぼりエリコに對するビスガの巔にいたりければエホバ之にギレアデの全地をダンまで見し ナフタリの全部エフライムとマナセの地およびユダの全地を西の海まで見し 南の地と棕櫚の邑なるエリコの谷の原をゾアルまで見したまへり 而してエホバかれに言たまひけるは我がアブラハム、イサク、ヤコブにむかひ之を汝の子孫にあたへんと言て誓ひたりし地は是なり 我なんぢをして之を汝の目に觀ることを得せしむ然ど汝は彼處に濟りゆくことを得ずと 斯の如くエホバの僕

一 モーセはエホバの言の如くモアブの地に死り エホバ、ベテベオルに對するモアブの地の谷にこれを葬り給へり今日までその墓を知る人なし 七 モーセはその死たる時百二十歳なりしがその目は瞶ますその氣力は衰へざり 八 き イスラエルの子孫モアブの地において三十日のあひだモーセのために哭泣をなしけるがモーセのために哭泣哀しむ日つひに満り

九 ヌンの子ヨシユアは心に智慧の充る者なりモーセその手をこれが上に按たるによりて然るなりイスラエルの子孫は之に聽したがひエホバのモーセに命じたまひし如くおこなへり 一〇 イスラエルの中にはこの後モーセのごとき預言者おこらざりきモーセはエホバが面を對せて知たまへる者なりき 一 即ちエホバ、エジプトの地においてかれをバロとその臣下とその全地につかはして諸々の徴證と奇蹟を行はせたまへり 二 またイスラエルの一切の人の目の前にてモーセその大なる能力をあらはし大なる畏るべき事を行へり

申命記

イ申三二・一三 二申一四・二四 ト申二七・一三 五申二五・一〇 六申二七・一八 七申二七・一八 八申二七・一八 九申二七・一八 一〇申二七・一八 一一申二七・一八 一二申二七・一八 一三申二七・一八 一四申二七・一八 一五申二七・一八 一六申二七・一八 一七申二七・一八 一八申二七・一八 一九申二七・一八 二〇申二七・一八 二一申二七・一八 二二申二七・一八 二三申二七・一八 二四申二七・一八 二五申二七・一八 二六申二七・一八 二七申二七・一八 二八申二七・一八 二九申二七・一八 三〇申二七・一八 三一申二七・一八 三二申二七・一八 三三申二七・一八 三四申二七・一八 三五申二七・一八 三六申二七・一八 三七申二七・一八 三八申二七・一八 三九申二七・一八 四〇申二七・一八 四一申二七・一八 四二申二七・一八 四三申二七・一八 四四申二七・一八 四五申二七・一八 四六申二七・一八 四七申二七・一八 四八申二七・一八 四九申二七・一八 五〇申二七・一八 五一申二七・一八 五二申二七・一八 五三申二七・一八 五四申二七・一八 五五申二七・一八 五六申二七・一八 五七申二七・一八 五八申二七・一八 五九申二七・一八 六〇申二七・一八 六一申二七・一八 六二申二七・一八 六三申二七・一八 六四申二七・一八 六五申二七・一八 六六申二七・一八 六七申二七・一八 六八申二七・一八 六九申二七・一八 七〇申二七・一八 七一申二七・一八 七二申二七・一八 七三申二七・一八 七四申二七・一八 七五申二七・一八 七六申二七・一八 七七申二七・一八 七八申二七・一八 七九申二七・一八 八〇申二七・一八 八一申二七・一八 八二申二七・一八 八三申二七・一八 八四申二七・一八 八五申二七・一八 八六申二七・一八 八七申二七・一八 八八申二七・一八 八九申二七・一八 九〇申二七・一八 九一申二七・一八 九二申二七・一八 九三申二七・一八 九四申二七・一八 九五申二七・一八 九六申二七・一八 九七申二七・一八 九八申二七・一八 九九申二七・一八 一〇〇申二七・一八

ヨシユア記

イ出二四・一三 申一	二二三・三二 民三四	七、六・二七 賽四三	一・七 香一一・二五	ヨ香一・七
ロ申三三・五	三二二・二四	申三三・六、八	ル申五・三三、二八	タ申三・一七、八、二二
ハ申一・二四	香へ出三・二	一三、五	ラ申二九・九	レ申二七・一、八、二二
ニ申一五・一八	出香一九・一七、三	又民二七・二三 申三	ワ申一七・一八、一九	ソ香三二・一、九、一、一

第一章

一 エホバの僕モーセの死し後エホバ、モーセの從者ヌンの子ヨシユアに語りて言たまはく 二 わが僕モーセは已に死り然ば汝いま此すべての民とともに起てこのヨルダンを濟り我がイスラエルの子孫に與ふる地にゆけ 三 凡そ汝らが足の跡にて踏む所は我これを盡く汝らに與ふ我が前にモーセに語し如し 四 汝らの疆界は荒野および此レバノンより大河ユフラテ河に至りてへテ人の全地を包ね日の没る方の大海に及ぶ 五 汝が生ながらふる日の間なんぢに當る事を得る人なかるべし我モーセと偕に在しごとく汝と偕にあらん 六 我なんぢを離れず汝を棄じ 七 心を強くしかつ勇め汝はこの民をして我が之に與ふることをその先祖等に誓ひたりし地を獲しむべき者なり 八 惟心を強くし勇み勵んで我僕モーセが汝に命ぜし律法をことごとく守りて行へ 九 之を離れて右にも左にも曲るなかれ然ば汝いづくに往ても利を得べし 一〇 この律法の書を汝の口より離すべからず夜も晝もこれを念ひて其中に録したる所をことごとく守りて行へ然ば汝の途福利を得汝かならず勝利を得べし 一 我なんぢに命ぜしにあらずや心を強くしかつ勇め汝の凡て往く處にて汝の神エホバ偕に在せば懼るゝ勿れ 戦慄なかれ 二 茲にヨシユア民の有司等に命じて言ふ 三 陣營の中を行めぐり民に命じて言へ汝等糧食を備へよ三日の内 四 汝らは此ヨルダンを濟り汝らの神エホバが汝らに與へて獲させんとしたまふ地を獲んために進みゆくべければなりと

五 イスラエルの人々の中より支派ごとに預て一人づつを取て備へおきぬその十二人の者を召よせ 而してヨシユアこれに言けるは汝らの神エホバの契約の櫃の前に當りて汝らヨルダンの中にすゝみ入りイスラエルの人々の支派の數に循ひて各々石ひとつを取あげて肩に負きたれ 是は汝らの中に徴となるべし後の日にいたりて汝らの子輩是等の石は何のこゝろなりやと問て言ば 之にいへ往昔ヨルダンの水エホバの契約の櫃の前にて截斷りたる事を表はすなり即ちそのヨルダンを濟れる時にヨルダンの水きれ止まれりこの故にこれらの石を永くイスラエルの人々の記念となすべしと

八 イスラエルのひとびとヨシユアの命ぜしごとく然なしエホバのヨシユアに告げたまひし如くイスラエルの人々の支派の數にしたがひてヨルダンの中より石十二を取あげ之を負わたりてその宿る處にいたり之を其處にすゑたり 九 ヨシユアまたヨルダンの中において契約の櫃を昇る祭司等の足を踏立し處に石十二を立たりしが今日までも尙ほ彼處にあり 櫃を昇る祭司等はエホバのヨシユアに命じて民に告しめたまひし事の悉く成るまでヨルダンの中に立をれり凡てモーセのヨシユアに命ぜし所に適へり民は急ぎて濟りぬ 民の悉く濟りつくせるときエホバの櫃および祭司等は民の觀る前にて濟りたり 一三 ルベンの子孫ガドの子孫およびマナセの支派の半モーセの之に言たりし如く身をよるひてイスラエルの人々に先だちて濟りゆき 凡そ四萬人ばかりの者軍の裝に身を堅め攻戦はんとてエホバに先だち濟りてエリコの平野に至れり 一四 エホバこの日イスラエルの衆人の目の前にてヨシユアを尊くしたまひければ皆モーセを畏れしごとくに彼を畏る其一生の間常に然り 一五 エホバ、ヨシユアに語りて言たまひけるは 一六 なんぢ證詞の櫃を昇る祭司等にヨルダンを出きたれと命ぜ

イ 香四・二一 出二二 一七、七八、三六、一六、四〇、
申六・二〇、申四四、ハ 出二二・二六、民三二・二〇、二七、
ヘ 出二五・一六、二二、

ト 香三・一五、又 香四・六、ワ 王上八・四、二、四三、カ 出二五・一六、代上、ヨ 出二四・三、申六、タ 民一三・二九、
チ 香五・九、ル 香三・一七、王下一九・一九、詩、二九・二二、詩八九、レ 出二五・二四、一五、ソ 王上二〇・五、
リ 香四・三、ラ 出二四・二一、一〇六、八、一〇三、二、詩八九、耶、レ 出二五・二四、一五、ツ 出四・二五、
一六、

一七 よ ヨシユアすなはち祭司等に命じヨルダンを出きたれと言ければ 一八 エホバの契約の櫃を昇る祭司等ヨルダンの中より出きたる祭司等足の跡を陸地に擧ると齊くヨルダンの水故の處に流れかへりて初のごとくその岸にことごとく溢れぬ 一九 正月の十日に民ヨルダンを出きたりエリコの東の境界なるギルガルに營を張り 二〇 時にヨシユアそのヨ

二一 ルダンより取きたらせし十二の石をギルガルにたて 二二 イスラエルの人々に語りて言ふ後の日にいたりて汝らの子輩その父に問て是らの石は何の意なりやと言ば 二三 その子輩に告しらせて言へ在昔イスラエルこのヨルダンを陸地となして濟りすぎし事あり 二四 即ち汝らの神エホバ、ヨルダンの水を汝らの前に乾涸して汝らを濟らせたまへり其事は汝らの神エホバの我らの前に紅海を乾涸して我らを渡らせたまひし狀況の如くなりき 二五 斯なしたまひしは地の諸の民をしてエホバの手の力あるを知しめ汝らの神エホバを恒に畏れしめんためなり

第五章

一 ヨルダンの彼旁に居るアモリ人の諸の王および海邊に居るカナン人の諸の王はエホバ、ヨルダンの水をイスラエルの人々の前に乾涸して我らを濟らせたまひしと聞きイスラエルの人々の事によりて神魂消え心も心ならずりき 二 その時エホバ、ヨシユアに言たまひけるは 汝石の小刀を作り重て復イスラエルの人々に割禮を行なへと 三 ヨシユアすなはち石の小刀を作り陽皮山にてイスラエルの人々に割禮を行へり 四 ヨシユアが割禮を行ひし所以は是なりエジプトより出きたりし民の一切の男すなはち軍人は皆エジプトを出し後途にて荒野に死たりしが 五 その出來し民はみな割禮を受たる者なりき然どエジプトを出し後途にて荒野に生れし民には皆割禮を施

三〇 かれらを汝らの手に付したまへるぞかしと ヨシユアおよびイスラエルの子孫おびたゞしく彼らを撃殺して
 三二 遂に殺し盡しその撃もたらされて遺れる者等城々に逃るにおよびて 民みな安然にマツケダの陣營にかへりて
 三三 ヨシユアの許にいたりけるがイスラエルの子孫にむかひて舌を鳴すもの一人もなかりき
 三四 時にヨシユア言ふ洞穴の口を開きて洞穴よりかの五人の王を我前に曳いだせと やがて然なしてかの五
 三五 人の王すなはちエルサレムの王ヘブロン、王ヤルムテの王ラキシの王およびエグロンの王を洞穴より彼の前に曳
 三六 いだせり かの王等をヨシユアの前に曳いだし、時ヨシユア、イスラエルの一切の人々を呼よせ己とともに往
 三七 し軍人の長等に言けるは汝ら近よりて此王等の頸に足をかけよと乃は近よりてその王等の頸に足をかければ
 三八 ヨシユアこれに言ふ汝ら懼るゝ勿れ懼く勿れ心を強くしかつ勇めよ汝らが攻て戦ふ諸の敵にはエホバすべ
 三九 て斯のごとく爲たまふべしと かくて後ヨシユア彼らを撃て死しめ五個の木にかけて晩暮まで木の上これを
 四〇 曝しおきしが 日の没る時におよびてヨシユア命を下しければ之を木より取おろしその隠れたりし洞穴に投い
 四一 れて洞穴の口に大石を置り是は今日が日まで存す
 四二 ヨシユアかの日マツケダを取り刃をもて之とそその王とを撃ち之とその中なる一切の人をことごとく滅して
 四三 一人をも遺さずエリコの王になしたるごとくにマツケダの王にも爲しぬ
 四四 かくてヨシユア一切のイスラエル人を率ゐてマツケダよりリブナに進みてリブナを攻て戦ひけるに
 四五 ホバまた之とそその王をもイスラエルの手に付したまひしかば刃をもて之とその中なる一切の人を撃ほろぼし一人
 四六 ももその中に遺さずエリコの王に爲たるごとくにその王にも爲ぬ

一〇・二〇—三〇
 一〇・二〇—三〇
 一〇・二〇—三〇

一〇・二〇—三〇
 一〇・二〇—三〇
 一〇・二〇—三〇

三二 けるに エホバ、ラキシをイスラエルの手に付したまひければ第二日にこれを取り刃をもて之とその中なる
 三三 一切の人々を撃ちほろぼせり凡てリブナに爲たるがごとし
 三四 時にゲゼルの王ホルム、ラキシを授けんとて上りきたりければヨシユアかれとそその民とを撃ころして終に
 三五 一人をも遺さざりき
 三六 斯てヨシユア一切のイスラエル人を率ゐてラキシよりエグロンに進み之に對ひて陣を取りこれを攻て戦ひ
 三七 その日にこれを取り刃をもて之を撃その中なる一切の人をことごとくその日に滅ぼせり凡てラキシに爲たる
 三八 が如し
 三九 ヨシユアまた一切のイスラエル人をひきゐてエグロンよりヘブロンに進みのぼり之を攻て戦ひ やがて
 四〇 これを取り之とそその王およびその一切の邑々とその中なる一切の人を刃にかけて撃ころして一人をも遺さざりき
 四一 凡てエグロンに爲たるが如し即ち之とその中なる一切の人をことごとく滅ぼせり
 四二 かくてヨシユア一切のイスラエル人を率ゐてリブナに至り之を攻て戦ひ 之とそその王およびその
 四三 一切の邑を取り刃をもて之を撃てその中なる一切の人をことごとく滅ぼし一人をも遺さざりき其テビルと其王に
 四四 爲たる所はヘブロンに爲たるが如く又リブナとそその王に爲たるがごとくなりき
 四五 ヨシユアかく此全地すなはち山地、南の地、平地および山腹の地ならびに其すべての王等を撃ほろぼして人
 四六 一箇をも遺さず凡て氣息する者は盡くこれを滅ぼせりイスラエルの神エホバの命じたまひしごとし
 四七 ア、カデシバルネアよりガザまでの國々およびゴセンの全地を撃ほろぼしてギベオンにまで及ぼせり
 四八 イスラ

一〇・三二—四二

一〇・三二—四二

エルの神エホバ、イスラエルのために戦たたかひたまひしに因よてヨシユアこれらの諸王しよわうおよびその地を一時に取りとりかくてヨシユア一切のイスラエル人を率ひきゐてギルガルの陣營せんえいにかへりぬ

第一章

ハズルの王わうヤビン之を聞きおよびマドンの王わうヨバブ、シムロンの王わうアクサフの王わう および北の地ち山地やまち キンネロテの南みなみのアラバ 平地ひらち 西にしの方かたなるドルの高處たかみなどに居やる王等わうたち すなはち東西とうせいの力ちから

ナン人びとアモリ人びとヘテ人びとペリジ人びと山地やまちのエブス人びとミツバの地ちなるヘルモンの麓ふもとのヒビ人びとなどに人ひとを遣つかはせり

爰こゝに彼らかれらの諸軍勢しよぐんせいを率ひきゐて出いきたれり其民そのたみの衆多おほきことは濱はまの砂まごこの多おほきがごとくにして馬うまと車くるまもまた甚なほだ

多おほかりき これらの王わうたち皆みなあひ會あひして進すすみきたり共にメロムの水みづの邊ほとりに陣せんをとりてイスラエルと戦たたかはんとす

六 時にエホバ、ヨシユアに言いたまひけるは彼らかれらの故ゆゑによりて懼おそるゝ勿なれ明日あすの今頃いまごろわれ彼らかれらをイスラエルの

前まへに付ついて盡ことごとく殺ころさしめん汝なんぢかれらの馬うまの足あしの筋すぢを截きり火ひをもて彼らかれらの車くるまを焚やくべしと ヨシユアすなはち一切

の軍人いくさびとを率ひきゐて俄然にはかにメロムの水みづの邊ほとりに押寄おしよせて之これを襲おそひけるに エホバこれをイスラエルの手てに付ついたまひし

かば則すなはち之これを撃うちやぶりて大シドンのおよびミスレポタマムまで之これを追おひき東ひがしの方かたにては又またミツバの谷たにまでこれを

追おひき遂つひに一人ひとりをも遺のこさず撃うちとれり ヨシユアすなはちエホバの己おのれに命めいじたまひしことにしたがひて彼らかれらの馬

の足あしの筋すぢを截きり火ひをもてその車くるまを焚やくり

二 十じゅうすなはちその時ときヨシユア歸かへりきたりてハズルを取り刃やいばをもてその王わうを撃うちり在昔いざしハズルは是らこれらの諸國しよこくの盟主めいしゆたりき

即すなはち刃やいばをもてその中なかなる一切すべての人ひとを撃うちてことごとく之これを滅ほろぼし氣息いきする者ものは一人ひとりだに遺のこさざりき又火またひをもて

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

ヨシユア記 一〇・四三—一一・一一 四一四

二 してアンモンの子孫の境界までの地 二二 ギレアデ、ゲシュル人及びマアカ人の境界に沿る地 二二 ヘルモン山の全土
 三 サルカまでバシヤン一圓 二二 アシタロテおよびエデレイにて世を治めしバシヤンの王オグの全國 二二 オグはレバイム
 四 餘民の遺れる者なり 二二 モーセこれらを撃て逐はらへり 二二 但しゲシュル人およびマアカ人はイスラエルの子孫
 五 これを逐はらざりき 二二 ゲシュル人とマアカ人は今日までイスラエルの中に住る 二二 唯レビの支派にはヨシユア
 六 何の産業をも與へざりき 二二 是イスラエルの神エホバの火祭 二二 これが産業たればなり 二二 其かれに言たまひしが如し
 七 モーセ、ルベンの子孫の支派にその宗族にしたがひて與ふる所ありしが 二二 その境界の内はアルノンの谷
 八 の端なるアロエルよりこなたの地 二二 谷の中なる邑 二二 メデバの邊の一切の平地 二二 ヘシボンおよびその平地の一切の
 九 邑々 二二 デボン、バモテバアル、ベテバアルメオン 二二 ヤハヅ、ケデモテ、メバアテ 二二 キリアタイム、シブマ、谷中の山
 十 のゼレテシヤハル 二二 ペテベオル、ビスガの山腹 二二 ベテエシモテ 二二 平地の一切の邑々 二二 ヘシボンにて世を治めし
 十一 アモリ人の王シホンの全國 二二 モーセ、シホンをミデアンの貴族エビ、レケム、ツル、ホルおよびレバとあはせて
 十二 撃ころせり 二二 是みなシホンの大臣にしてその地に住をりし者なり 二二 イスラエルの子孫またベオルの子ト筵師バラ
 十三 ムをも刃にかけてその外に殺せし者等とともに殺せり 二二 ルベンの子孫はヨルダンおよびその河岸をもて己の
 十四 境界とせり 二二 ルベンの子孫がその宗族に循がひて獲たる産業は是のごとくにして邑も村もこれに准らふ
 十五 モーセまたガドの子孫たるガドの支派にもその宗族にしたがひて與ふる所ありしが 二二 その境界の内は
 十六 ヤゼル、ギレアデの一切の邑々 二二 アンモンの子孫の地の半 二二 ラバの前なるアロエルまでの地 二二 ヘシボンよりラマ

イ 番一・二五	ホ 民一八・二〇、二三、	リ 民二一・三〇	番 八	ワ 民三二・三八	レ 民三二・八	二 九	申 二・一九
ロ 申三二・一七	二四番一四、一四、	一三九	カ 申三二・七	番 二・二	ソ 民二二・五、三二	士 二・二二、二五	ナ 母後二二・二二、二二
ハ 民二一・二四、三五	ト 番一三・三三	又 民三二・三八	ル 民二一・三三	ヨ 申三二・一〇	ツ 民三二・三五	二 六	
ニ 番一三・一一	チ 民二一・二八	タ 民三二・三七		タ 民二一・二四	ネ 民二一・二六、二八、		
ラ 民三二・二六	王 上	ウ 民三四・一一	代 上	ノ 番一・二、四	ヤ 民一八・二〇	申 二	マ 民三四・一七、一八
ミ 三三・一七	井 民三二・四一	二・三三	ク 番一三・一四、一八	オ 民三二・三九、四〇	ヤ 民一八・二〇	申 二	マ 民三四・一七、一八
七・四六				ク 番一三・一四、一八	一〇・九、一八・二	ケ 民二六・五五、三三	フ 番一三・八、三二
							コ 創四八・五代上五

二七 テミツバまでの地およびベトニム、マハナイムよりデビルの境界までの地 二七 谷においてはベテハラム、ベテ
 二八 ニムラ、スコテ、ザボンなどヘシボンの王シホンの國の残れる部分 二八 ヨルダンおよびその河岸よりしてヨルダン
 二九 の東の方キンネレテの海の岸までの地 二八 ガドの子孫がその宗族にしたがひて獲たる産業は是のごとくにして邑
 三〇 も村も之に准らふ 二九
 三〇 モーセまたマナセの支派の半にも與ふる所ありき 三〇 是すなはちマナセの支派の半にその宗族にしたがひて
 三一 與へしなり 三〇 その境界の内はマハナイムより此方の地 三〇 バシヤンの全土 三〇 バシヤンの王オグの全國 三〇 バシヤン
 三二 にあるヤイルの一切の邑すなはち其六十の邑 三二 ギレアデの半 三二 バシヤンにおけるオグの國の邑々 三二 アシタロテ
 三三 およびエデレイ 三三 是等はマナセの子マキルの子孫に歸せり 三三 即ちマキルの子孫の半 三三 その宗族にしたがひて之を獲た
 三四 り 三三
 三五 ヨルダンの東の方に於てエリコに對ひをるモアブの野にてモーセが分ち與へし産業は是のごとし 三五 但し
 三六 レビの支派にはモーセ何の産業をも與へざりき 三六 イスラエルの神エホバこれが産業たればなり 三六 其かれに言たまひ
 三七 し如し 三六

第四章 一 イスラエルの子孫がカナンの地にて取しその産業の地は左のごとし 一 即ち祭司エレアザル、ヌンの
 二 子ヨシユアおよびイスラエルの子孫の支派の族長等 二 これを彼らに分ち 二 エホバがモーセによりて
 三 命じたまひしごとく 三 産業の籤によりて之を九の支派および半の支派に與ふ 三 其はヨルダンの彼旁にてモーセ
 四 已にかの二の支派と半の支派とに産業を與へたればなり 四 但しレビ人には之が中に産業を與へざりき 四 是はヨセ

ヨシユアそのエホバに命ぜられしごとくエフソネの子カレブにユダの子孫の中にキリアテアルバすなはちへブロンを與へてその分となさしむアルバはアナクの父なり カレブかしこよりアナクの子三人を逐はらへり是すなはちアナクより出たるセシヤイ、アヒマンおよびタルマイなり 而して彼かしこよりデビルの民の所に攻上りデビルの名は元はキリアテセルといふ カレブ言けらくキリアテセルを撃てこれを取る者には我女子アクサを妻に與へんと ケナズの子にしてカレブの弟なるオテニエルといふ者これを取ればカレブその女子アクサを之が妻に與へたり アクサ適く時田野をその父に求むべきことをオテニエルに勧め遂にみづから驢馬より下りカレブこれに何を望むやと言ければ 答へて言ふ我に粧奩を與へよ汝われを南の地に遣なれば水泉をも我に與へよ乃ち上の泉と下の泉とをこれに與ふ

ユダの子孫の支派がその宗族にしたがひて獲たる産業は是のごとし
 ユダの子孫の支派が南においてエドムの境界の方に有るその遠き邑々は左のごとしカブジエル、エデル、ヤグル キナ、デモナ、アダダ ケデシ、ハズル、イテナン ジフ、テレム、ベアロテ ハズルハダツタ、ケリオテヘヅロンすなはちハズル アمام、シマ、モラダ ハザルガダ、ヘシモン、ベテバレテ ハザルシユアル、ベエルシバ、ビジヨテヤ バアラ、イキム、エゼム エルトラデ、ケシル、ホルマ チクラグ、マデマンナ、サンサンナ レバオテ、シルヒム、アイン、リンモン、その邑あはせて二十九ならびに之に屬する村々なり

平野にてはエシタオル、ゾラ、アシナ ザノア、エンガンニム、タツプア、エナム ヤルムテ、アド

ラム、シヨコ、アゼカ シヤアライム、アダタイム、ゲデラ、ゲデロタイム合せて十四邑ならびに之に屬する村々なり

ゼナン、ハダシヤ、ミグダルガデ デラン、ミヅバ、ヨクテル ラキシ、ボヅカテ、エグロン カボン、ラマム、キリテシ ゲデロテ、ベテダゴン、ナアマ、マツケダ合せて十六邑ならびに之に屬する村々なり 又、またリブナ、エテル、アシヤン イフタ、アシナ、ネジブ ケイラ、アクジブ、マレシヤ合せて九邑ならびに之に屬する村々なり

エクロンならびにその郷里および村々なり エクロンより海まで凡てアシドドの邊にある處々ならびに之につける村々なり エシドドならびにその郷里および村々 ガザならびにその郷里および村々 エジプトの河および大海の濱にいたるまでの處々なり

山地にてはシヤミル、ヤツテル、シヨコ ダンナ、キリアテサンナすなはちデビル アナブ、エシテモ、アニム ゴセン、ホロン、ギロ、合せて十一邑ならびに之に屬する村々なり アラブ、ドマ、エシヤン、ヤニム、ベテタツプア、アベカ ホムタ、キリアテアルバすなはちへブロン、チオルあはせて九邑ならびに之につける村々なり マオン、カルメル、ジフ、ユダ エズレル、ヨグテアム、ザノア カイン、ギベア、テムナあはせて十邑ならびに之に屬する村々なり ハルホル、ベテズル、ゲドル マアラテ、ベテアノテ、エルテコンあはせて六邑ならびに之に屬する村々

一 郷里イブレアムとその郷里ドルの民とその郷里およびエンドルの民とその郷里、タアナクの民とその郷里、メギ
 二 ドンの民とその郷里など合せて三の高處を有り、
 三 但しマナセの子孫は是らの邑の民を逐はらふことを得ざり
 ければカナン人この地に固く住ひをりしが、
 四 イスラエルの子孫強くなるに及びてカナン人を使役し之を盡く
 逐ことはせざりき

一 茲にヨセフの子孫ヨシユアに語りて言けるはエホバ今まで我を祝福たまひて我は大なる民となりけるに汝
 二 わが産業にとて只一の籤一の分のみを我に與へしは何ぞや、
 三 ヨシユアかれらに言けるは汝もし大なる民となり
 四 しならば林に上りゆきて彼處なるペリジ人およびレバイム人の地を自ら斬ひらくべしエフライムの山地は汝には
 五 狭しと言ばなり、
 六 ヨセフの子孫言けるは山地は我らには足すかつ又谷の地にをるカナン人はベテシヤンとその
 七 郷里にをる者もエズレルの谷にをる者も凡て鐵の戰車を有り、
 八 ヨシユアかかねてヨセフの家すなはちエフ
 九 ライムとマナセに語りて言ふ汝は大なる民にして大なる力あり然れば只一籤のみを取てをる可らず、
 一〇 山地をも
 一一 汝の有とすべし是は林なれども汝これを斬ひらきてその極處を獲べしカナン人は鐵の戰車を有をりかつ強く
 一二 あれども汝これを逐はらふことを得ん

第一八章

一 かくてイスラエルの子孫の會衆ごとくシロに集り集會の幕屋をかしこに立つその地は已に
 二 彼らに歸服ぬ、
 三 この時なほイスラエルの子孫の中に未だその産業を分ち取ざる支派七のこりぬけ
 四 るれば、
 五 ヨシユア、イスラエルの子孫に言けるは汝らは汝らの先祖の神エホバの汝らに與へたまひし地を取に往
 六 くことを何時まで怠りをるや、
 七 汝ら支派ごとに三人づゝを擧よ我これを遣さん彼らは起てその地を歩きめぐり

イ士二・二七、二八、
 一六、一七、
 一八、
 一九、
 二〇、
 二一、
 二二、
 二三、
 二四、
 二五、
 二六、
 二七、
 二八、
 二九、
 三〇、
 三一、
 三二、
 三三、
 三四、
 三五、
 三六、
 三七、
 三八、
 三九、
 四〇、
 四一、
 四二、
 四三、
 四四、
 四五、
 四六、
 四七、
 四八、
 四九、
 五〇、
 五一、
 五二、
 五三、
 五四、
 五五、
 五六、
 五七、
 五八、
 五九、
 六〇、
 六一、
 六二、
 六三、
 六四、
 六五、
 六六、
 六七、
 六八、
 六九、
 七〇、
 七一、
 七二、
 七三、
 七四、
 七五、
 七六、
 七七、
 七八、
 七九、
 八〇、
 八一、
 八二、
 八三、
 八四、
 八五、
 八六、
 八七、
 八八、
 八九、
 九〇、
 九一、
 九二、
 九三、
 九四、
 九五、
 九六、
 九七、
 九八、
 九九、
 一〇〇、

一 其の産業にしたがひて之を描き寫して我に歸るべし、
 二 彼らその地を分ちて七分となすべし、
 三 ユダは南にてその
 四 境界の内にをり、
 五 ヨセフの家は北にてその境界の内にをるべし、
 六 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 七 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 八 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 九 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 一〇 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 一一 其の地を分ちて七分となすべし、
 一二 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 一三 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 一四 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 一五 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 一六 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 一七 其の地を分ちて七分となすべし、
 一八 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 一九 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 二〇 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 二一 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 二二 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 二三 其の地を分ちて七分となすべし、
 二四 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 二五 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 二六 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 二七 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 二八 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 二九 其の地を分ちて七分となすべし、
 三〇 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 三一 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 三二 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 三三 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 三四 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 三五 其の地を分ちて七分となすべし、
 三六 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 三七 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 三八 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 三九 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 四〇 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 四一 其の地を分ちて七分となすべし、
 四二 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 四三 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 四四 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 四五 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 四六 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 四七 其の地を分ちて七分となすべし、
 四八 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 四九 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 五〇 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 五一 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 五二 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 五三 其の地を分ちて七分となすべし、
 五四 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 五五 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 五六 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 五七 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 五八 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 五九 其の地を分ちて七分となすべし、
 六〇 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 六一 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 六二 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 六三 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 六四 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 六五 其の地を分ちて七分となすべし、
 六六 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 六七 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 六八 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 六九 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 七〇 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 七一 其の地を分ちて七分となすべし、
 七二 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 七三 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 七四 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 七五 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 七六 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 七七 其の地を分ちて七分となすべし、
 七八 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 七九 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 八〇 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 八一 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 八二 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 八三 其の地を分ちて七分となすべし、
 八四 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 八五 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 八六 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 八七 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 八八 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 八九 其の地を分ちて七分となすべし、
 九〇 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 九一 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 九二 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 九三 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 九四 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと
 九五 其の地を分ちて七分となすべし、
 九六 汝らその地を描き寫して七分となし此にわが
 九七 許に持きたれ我こゝにて我等の神エホバの前になんぢらの爲に籤を擧ん、
 九八 レビ人は汝らの中に何の分をも有す
 九九 エホバの祭司となることをもて其産業とす又ガド、ルベンおよびマナセの支派の半はヨルダンの彼旁東の方に
 一〇〇 已にその産業を受たり是エホバの僕モーセの之に與へし者なりと

一六 ネフトアの水の源にいたり 一六 レバイムの谷の中の北の方にてベニヒンノムの谷の前に横たはる所の山の極處に
 一七 下り其處よりしてヒンノムの谷に下りてエブス人の南の脇にいたりエンロゲルに下り 一七 北に延てエンシメシに
 一八 おもむきアドミムの阪に對へるゲリロテにおもむきルベン人、ボハンの石まで下り 一八 北の方にてアラバに對す
 一九 る處にわたりてアラバに下り 一九 ベテホグラの北の脇にわたりヨルダンの南の極にて鹽海の北の入海にいたりて
 二〇 盡くその南の境界は是のごとし 二〇 東の方にてはヨルダンその境界となる是すなはちベニヤミンの子孫がその
 二一 宗族にしたがひて獲たる産業の周囲の境界なり
 二二 ベニヤミンの子孫の支派がその宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 二四 テアラバ、ゼマライム、ベテル 二四 アビム、バラ、オフラ 二四 ケバルアンモン、オフニ、ケバの十二邑ならびに
 二五 之に屬る村々なり 二五 ギベオン、ラマ、ベエロテ 二六 ミツバ、ケビラ、モザ 二七 レケム、イルビエル、タララ、
 二八 ゼラ、エレフ、エブスすなはちエルサレム、ギベア、キリアテの十四邑ならびに之につける村々は是なり 二八
 二九 ヤミンの子孫がその宗族にしたがひて獲たる産業は是のごとし
 一 次シメオンの子孫の支派のためにその宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 二 次シメオンの子孫の支派のためにその宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 三 次シメオンの子孫の支派のためにその宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 四 次シメオンの子孫の支派のためにその宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 五 次シメオンの子孫の支派のためにその宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 六 次シメオンの子孫の支派のためにその宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 七 次シメオンの子孫の支派のためにその宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 八 次シメオンの子孫の支派のためにその宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三

イ 卷一五九
ロ 卷一五八
ハ 卷一五七

ニ 卷一五六
ホ 卷一五八
ヘ 卷一五八

ト 卷一九九
チ 卷二八

リ 卷一九九
ヌ 卷一九九

ル 卷二二二

第一章

九 村々等なりシメオンの子孫の支派がその宗族にしたがひて獲たる産業は是のごとし 九 シメオンの子孫の産業は
 ユダの子孫の分の中より出づ 是ユダの子孫の自分分のためには多かりしに因てシメオンの子孫おのれの産業を
 彼らの産業の中に獲たるなり

一〇 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 一〇 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 一一 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 一二 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 一三 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 一四 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 一五 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 一六 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 一七 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 一八 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 一九 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 二〇 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 二一 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 二二 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 二三 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 二四 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 二五 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 二六 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三
 二七 第三にゼブルンの子孫のために其宗族にしたがひて獲たる邑々はエリコ、ベテホグラ、エメクケジツ 二三

二八 してカブルに出で エブロン、レホブ、ハンモン、カナにわたりて大シドンにまでいたり ラマに旋り
 二九 ツロの城に及びまたホサに旋りアクジブの邊にて海にいたりて盡く またウンマ、アベクおよびレホブありそ
 三〇 の邑あはせて二十二また之につける村々あり アセルの子孫の支派がその宗族にしたがひて獲たる産業および
 三一 その邑々村々は是のごとし

三二 第六にナフタリの子孫のためにナフタリの子孫の宗族にしたがひて籤を擧り その境界はヘレフより即
 三三 ちザアナイムの椏の樹より起りアダミネケブおよびヤブニエルを経てラクムにいたりヨルダンにいたりて盡く
 三四 而して其境界西に旋りてアズノテタボルにいたり彼處よりホツコクに出で南はゼブルンに達し西はアセルに
 三五 達し日の出る方はヨルダンの邊にてユダに達す その堅固なる邑々はヂテム、ゼル、ハンマテ、ラツカテ、
 三六 キンネレテ アダマ、ラマ、ハゾル ケデシ、エデレイ、エンハゾル イロン、ミグダルエル、ホレム、
 三七 ペテアナテ、ベテシメシなど合せて十九邑亦これにつける村々あり ナフタリの子孫の支派がその宗族にした
 三八 がひて獲たる産業およびその邑々村々は是のごとし

三九 第七にダンの子孫の支派のためにその宗族にしたがひて籤を擧り その産業の境界の内はゾラ、エシタ
 四〇 オル、イルシメシ シヤラビム、アヤロン、イテラ エロン、テムナ、エクロン エルテケ、ギベトン、
 四一 バアラテ エホデ、ベネベラク、ガテリンモン メヤルコン、ラツコン、ヨツバと相對ふ地などなり 但
 四二 シダンの子孫の境界は初よりは廣くなれり其はダンの子孫上りゆきてライシを攻取り刃をもちてこれを擧ほろぼ
 四三 し之を獲て其處に住たればなり而してその先祖ダンの名にしたがひてライシをダンと名けたり 四四 四八 四九
 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

支派がその宗族にしたがひて獲たる産業およびその邑々村々は是のごとし
 かく境界を畫りて産業の地を與ふることを終ぬ而してイスラエルの子孫おのれの中にてヌンの子ヨシユア
 に産業を與へたり すなはちエホバの命にしたがひて彼にその求むる邑を與ふエフライムの山地なるテムナテ
 セラ是なり彼の邑を建なほして其處に住む
 祭司エレアザル、ヌンの子ヨシユアおよびイスラエルの子孫の支派の族長等がシロにおいて集會の幕屋の
 門にてエホバの前に籤をもて分與へし産業は是のごとし斯地を分つことを終たり

第二〇章

一 茲にエホバ、ヨシユアに告て言たまひけるは 汝イスラエルの子孫に告て言へ汝等モーセによ
 二 りて我が汝らに語りおきし逃遁の邑を擇び定め 誤りて知すに人を殺せる者を其處に逃れしめよ
 三 是は汝らが仇打する者を避て逃るべき處なり 斯る者は是等の邑の一に逃れゆき邑の門の入口に立てその邑の
 四 長老等の耳にその事情を述べし然る時は彼ら之をその邑に受け入れ處を與へて己の中に住しむべし 假令仇打す
 五 る者追ゆくとも彼らその人を殺せる者を之が手に交すべからず其は彼知すして人を殺せるにて素より之を惡みを
 六 りしに非ればなり その人は會衆の前に立て審判を受けるまで其時の祭司の長の死る迄その邑に住るべし然る
 七 後その人を殺せる者己の邑に歸り往てその家にいたり己が逃いでし邑に住むべし
 八 爰にナフタリの山地なるガリラヤのケデシ、エフライムの山地なるシケムおよびユダの山地なるキリアテ
 九 アルバ(すなはちヘブロン)を之がために分ち またヨルダンの彼旁エリコの東の方にてはルベンの支派の中よ
 一〇 り平地なる荒野のベゼルを擇び定めガドの支派の中よりギレアデのラモテを擇び定めマナセの支派の中よりバシ

三〇 祭司ビネハスおよび會衆の長等即ち彼ともなるイスラエルの宗族の首等はルベンの子孫ガドの子孫およびマナセの子孫に言けるは我ら今日エホバの我らの中に在すを知る其は汝らエホバにむかひて此愆を犯さざればなり今なんぢらはイスラエルの子孫をエホバの手より救ひいだせりと 祭司エレアザルの子ビネハスおよび牧伯等すなはちルベンの子孫およびガドの子孫に別れてギレアデの地よりカナンの地に歸りイスラエルの子孫にいたりて復命しけるに イスラエルの子孫これを善とせり而してイスラエルの子孫神を讃めルベンの子孫およびガドの子孫の住を國を滅ぼしに攻上らんと重ねて言ざりき ルベンの子孫およびガドの子孫その壇をエド(證)と名けて云ふ是は我らの間にありてエホバは神にいますとの證をなす者なりと

一 エホバ、イスラエルの四方の敵をことごとく除きて安息をイスラエルに賜ひてより久しき後すなはちヨシユア年邁みて老たる後 ヨシユア一切のイスラエル人すなはち其長老首領裁判人官吏などを招きよせて之に言けるは 我は年すゝみて老ゆ汝らは已に汝らの神エホバが汝らのために此もろもろの國人に行ひたまひし事を盡く見たり即ち汝らの神エホバみづから汝らのために戦ひたまへり 視よ我ヨルダンより日の入る方大海までの此もろもろの漏のこれる國々および已に滅ぼしたる一切の國々を籤にて汝らに分ちて汝らの支派の産業となさしめたり 汝らの神エホバみづから汝らの前よりその國民を打攘ひ汝らの目の前よりこれを逐はらひたまはん而して汝らは汝らの神エホバの汝らに宣まひしごとく之が地を獲にいたるべし 然ば汝ら勵みてモーセの律法の書に記されたる所を盡く守り行なへ之を離れて右にも左にも曲るなかれ 汝らの

第二十三章

一 中間に遺りを是等の國人の中に往なかれ彼らの神の名を唱ふるなかれ之を指て誓はしむる勿れ又これに事へこれを拜むなかれ 惟今日まで爲たるごとく汝らの神エホバに附したがへ 九 汝ら一人は國民を汝らの前より逐はらひたまへり 汝らには今日まで當ることを得る人一箇もあらざりき 一〇 汝らの一人は千人を逐ふことを得ん其は汝らの神エホバに宣まひしごとく自ら汝らのために戦ひたまへばなり 然ば汝ら自ら善く慎しみて汝らの神エホバを愛せよ 然らずして汝ら若もどりしつゝ是等の國人の漏のこりて汝らの中間に止まる者等と親しくなり之と婚姻をなして互に相往來しなば 汝ら確く知れ汝らの神エホバかさねて是等の國人を汝らの目の前より逐はらひたまはじ彼ら反て汝らの羅となり罟となり汝らの脇に鞭となり汝らの目に刺となりて汝ら遂に汝らの神エホバの汝らに賜ひしこの美地より亡び絶ん

一四 視よ今日われは世人の皆ゆく途を行んとす汝らは一心一念に善く知るならん汝らの神エホバの汝らにつきて宣まひし諸の善事は一も缺る所なかりき皆なんぢらに臨みてその中一も缺たる者なきなり 一五 汝らの神エホバの汝らに宣まひし諸の善事の汝らに臨みしごとくエホバまた諸の悪き事を汝らに降して汝らの神エホバの汝らに與へしこの美地より終に汝らを滅ぼし絶たまはん 一六 汝ら若なんぢらの神エホバの汝らに命じたまひしその契約を犯し往て他神に事へてこれに身を鞠むるに於てはエホバの震怒なんぢらに向ひて燃いでてなんぢらエホバに與へられし善地より迅速に亡びうせん

第二十四章

一 茲にヨシユア、イスラエルの一切の支派をシケムに集めイスラエルの長老首領裁判人官吏など

エホバのために祭壇を築き之をエホバシヤロムと名けたり是は今日に至るまでアビエゼル人のオフラに存る
 其夜エホバ、ギデオンのいひ給ひけるは汝の父の少き牡牛および七歳なる第二の牛を取り汝の父のもてる
 パアルの祭壇を毀ち其上なるアシラの像を斫り付し 汝の神エホバのためにこの堡砦の頂において次序をたゞ
 しくし祭壇を築き第二の牛を取りて汝が斫り倒せるアシラの木をもて燔祭を供ぐべし ギデオンはちその
 僕十人を携へてエホバのいひたまひしごとくに行へりされど父の家のものどもおよび邑の人を怖れたれば晝之を
 なすことを得ず夜に入りて之を爲り

邑の衆 朝興出て視にパアルの祭壇は摧け其上なるアシラの像は斫りされて居り新に築る祭壇に第二の
 牛の供へてありしかば たがひに此は誰が所爲ぞやと言ひつゝ尋ね問ひけるに此はヨアシの子ギデオンの所爲
 なりといふものありたれば 邑の人々ヨアシにむかひ汝の子を曳き出して死なしめよそは彼パアルの祭壇を
 摧き其上に在しアシラの像を斫り付したればなりといふ ヨアシおのれの周圍に立るすべてのものにいひけるは
 汝らはパアルの爲に争論ふや汝らは之を救んとするや之が爲に争論ふ者は朝の中に死べしパアルもし神ならば人
 其祭壇を摧きたれば自ら争論ふ可なりと 是をもて人衆ギデオンの祭壇を摧きたればパアル自ら之といひ
 あらそはんといひて此日かれをエルパアル(パアルいひあらそはん)と呼なせり

茲にミデアン人アマレク人および東方の民相集まりて河を濟りエズレルの谷に陣を取しが エホバの靈
 ギデオンに臨みてギデオン箠を吹たればアビエゼル人集りて之に従ふ ギデオン徧くマナセに使者を遣りしかば
 マナセ人また集りて之に従ふ彼またアセル、ゼブルン及びナフタリに使者を遣りしにその人々も上りて之を迎ふ

イ創二二・一四 出 士八・三二 二得前二二・一 後後 士六・三三 一・二一・一八 代下 二二・二七
 一七・一五 申三三 出三四・二三 申七 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一
 一六 創四八・三五 出三四・二三 申七 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一
 一七 創九・二〇 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一
 一八 代上 二四・二〇 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一
 一九 代下 二二・二七 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一
 二〇 士三三・一〇 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一
 二一 出四・三四・六七 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一
 二二 又創一八・三二 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一
 二三 士六・三三 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一
 二四 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一
 二五 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一 一・二二・一

ギデオン神にいひけるは汝かつていひたまひしごとくわが手をもてイスラエルを救はんとしたまはは
 視よ我一箇の羊の毛を禾場におかん露もし羊毛にのみおきて地はすべて燥きをらば我之れによりて汝がかつ
 て言たまひし如く吾が手をもてイスラエルを救ひたまふを知んと すなはち斯ありぬ彼明る朝早く興きいで
 羊毛をかき寄てその毛より露を搾りしに鉢に滿つるほどの水いできたる ギデオン神にいひけるは我にむかひ
 て怒を發したまふなかれ我をしていま一回いはしめたまへねがはくは我をして羊の毛をもていま一回試さしめた
 まへねがはくは羊毛のみを燥して地には悉く露あらしめたまへと その夜神かくの如くに爲したまふすなはち
 羊毛のみ燥きて地には凡て露ありき

第七章

斯てエルパアルと呼ぶるギデオンおよび之ともにあるすべての民朝風に興きいでてハロデの井
 のほとりに陣を取るミデアン人の陣はかれらの北の方にあたりモレの山に沿ひ谷のうちにありき
 エホバ、ギデオンにいひたまひけるは汝とともに在る民は餘りに多ければ我その手にミデアン人を付さじ
 おそらくはイスラエル我に向ひ自ら誇りていはん我わが手をもて己を救へりと されば民の耳に告示していふ
 べし誰にても懼れ慄くものはギレアデ山より歸り去るべしとこゝにおいて民のかへりしもの二萬二千人あり殘し
 ものは一萬人なりき
 エホバまたギデオンにいひたまひけるは民なほ多し之を導きて水際に下れ我かしこにて汝のために彼らを
 試みんおほよそ我が汝に告て此人は汝とともに行くべしといはんものはすなはち汝とともに行くべしまたおほよ
 そ我汝に告て此人は汝とともに行くべからずといはんものはすなはち行くべからざるなり ギデオン民をみち
 びきて水際に下りしにエホバ之にいひたまひけるはおほよそ犬の餌るがごとくその舌をもて水を舐るものは汝之

六 を別けおくべしまたおほよそ其の膝を折り屈みて水を飲むものをも然すべしと 手を口にあて、水を話したもの
 七 の数は三百人なり餘の民は盡くその膝を折り屈みて水を飲り エホバ、ギデオンのいひたまひけるは我水を
 八 話たる三百人の者をもて汝らを救ひミデアンを汝の手に付さん餘の民はおのおの其所に歸るべしと 此に
 おいて彼ら民の兵糧とその箠を手にうけとれりギデオンはちすすべてのイスラエル人を各自その天幕に歸らせ
 彼の三百人を留めおけり時にミデアンの陣はその下の谷のなかにありき

九 その夜エホバ、ギデオンにいひたまはく起よ下りて敵陣に入るべし我之を汝の手に付すなり されど
 汝もし下ることを怖れなば汝の僕フラを伴ひ陣所に下りて 彼らのいふ所を聞べし然せば汝の手強くなりて汝
 敵陣にくだることを得んとギデオンはち僕フラとともに下りて陣中にある隊伍のほとりに至るに ミデア
 ン人アマレク人およびすべて東方の民は蝗蟲のごとくに數衆く谷のうちに偃しをりその駱駝は濱の砂の多きが
 ごとくにして數ふるに勝ず ギデオン其處に至りしに或人その伴侶に夢を語りて居りすなはちいふ我夢を見た
 りしが夢に大麥のバンひとつミデアンの陣中に轉びいりて天幕に至り之をうち仆し覆したれば天幕倒れ臥り
 其の伴侶答へていふ是イスラエルの人ヨアシの子ギデオンの劍に外ならず神ミデアンとすべての陣營を之が
 手に付したまふなりと

一五 ギデオン夢の說話とその解釋を聞しかば拜をなしてイスラエルの陣所にかへりいひけるは起よエホバ汝ら
 の手にミデアンの陣をわたしたまふと かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

一六 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

一七 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

一八 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

一九 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

二〇 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

二一 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

二二 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

二三 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

二四 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

二五 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

二六 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

二七 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

二八 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

二九 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

三〇 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

三一 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

三二 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

三三 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

三四 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

三五 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

三六 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

三七 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

三八 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

三九 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

四〇 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

四一 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

四二 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

四三 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

四四 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

四五 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

四六 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

四七 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

四八 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

四九 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

五〇 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

五一 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

五二 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

五三 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

五四 かくて三百人を三隊にわかち手に手に箠および空瓶を取せその瓶の
 なかに燈火をおかしめ これにいひけるは我を視てわが爲すところにならへ我が敵陣の邊に至らんときに爲す

第八章

エフライムの人々ギデオンにむかひ汝ミデアン人と戦はんとて往る時われらを召ざりしが斯る
 ことを我らになすは何故ぞといひていたく之を詰りたり 一
 ギデオンこれにいひけるは今吾が成る
 ところは汝らのなせる所に比ぶべけんやエフライムの拾ひ得し遺餘の葡萄はアビエゼルの收穫し葡萄にも勝れる
 二

四九 せよといひしかば 民もまた皆おのおのその枝を折りおとしアビメレクに従ひて枝を塔に倚せかけ塔に火を
 かけて彼等を攻むこゝにおいてシケムの櫓の人もまた悉く死に男女およそ一千人なりき
 五〇 茲にアビメレク、テベツに赴きテベツに對て陣を張て之を取しが 邑のなかに一の堅固なる櫓ありて
 五二 すべての男女および邑の民みな其所に遁れ往き後を鎖して櫓の頂に上りたれば アビメレクすなはち櫓のもと
 五三 に押寄て之を攻め櫓の口に近きて火をもて之を焚んとせしに 一人の婦アビメレクの頭に磨石の上層石を投げ
 五四 てその脳骨を砕けり アビメレクおのれの武器を執る少者を急ぎ召て之にいひけるは汝の劍を抜て我を殺せ
 五五 おそらくは人吾をさして婦に殺されたりといはん と其少者之を刺し通したればすなはち死に イスラエルの
 五六 人々はアビメレクの死たるを見ておのおのおのの處に歸り去りぬ 神はアビメレクがその七十人の兄弟を
 五七 殺しておのれの父になしたる惡に斯く報いたまへり またシケムの民のすべての惡き事をも神は彼等の頭に報
 いたまへりすなはちエルバアルの子ヨタムの詛彼らの上に及べるなり

第一章

一 アビメレクの後イツサカルの人にてドドの子なるブワの子トラ起りてイスラエルを救ふ彼エフラ
 二 イムの山のシヤミルに住み 二十三年の間イスラエルを審判しがつひに死してシヤミルに葬らる
 三 彼の後にギレアデ人ヤイル起りて二十二年の間イスラエルを審判たり 彼に子三十人ありて三十の驢馬
 四 に乗る彼等三十の邑を有りギレアデの地において今日までヤイルの村となふるものすなはち是なり ヤイル
 五 死てカモンに葬らる
 六 イスラエルの子孫ふたゝびエホバの目のまへに惡を爲しバアルとアシタロテ及びスリヤの神シドンの神モ

イ 後一・二一
 二 後一・二二
 三 後一・二三
 四 後一・二四
 五 後一・二五
 六 後一・二六
 七 後一・二七
 八 後一・二八
 九 後一・二九
 一〇 後一・三〇
 一一 後一・三一
 一二 後一・三二
 一三 後一・三三
 一四 後一・三四
 一五 後一・三五
 一六 後一・三六
 一七 後一・三七
 一八 後一・三八
 一九 後一・三九
 二〇 後一・四〇
 二一 後一・四一
 二二 後一・四二
 二三 後一・四三
 二四 後一・四四
 二五 後一・四五
 二六 後一・四六
 二七 後一・四七
 二八 後一・四八
 二九 後一・四九
 三〇 後一・五〇
 三一 後一・五一
 三二 後一・五二
 三三 後一・五三
 三四 後一・五四
 三五 後一・五五
 三六 後一・五六
 三七 後一・五七
 三八 後一・五八
 三九 後一・五九
 四〇 後一・六〇
 四一 後一・六一
 四二 後一・六二
 四三 後一・六三
 四四 後一・六四
 四五 後一・六五
 四六 後一・六六
 四七 後一・六七
 四八 後一・六八
 四九 後一・六九
 五〇 後一・七〇
 五一 後一・七一
 五二 後一・七二
 五三 後一・七三
 五四 後一・七四
 五五 後一・七五
 五六 後一・七六
 五七 後一・七七
 五八 後一・七八
 五九 後一・七九
 六〇 後一・八〇
 六一 後一・八一
 六二 後一・八二
 六三 後一・八三
 六四 後一・八四
 六五 後一・八五
 六六 後一・八六
 六七 後一・八七
 六八 後一・八八
 六九 後一・八九
 七〇 後一・九〇
 七一 後一・九一
 七二 後一・九二
 七三 後一・九三
 七四 後一・九四
 七五 後一・九五
 七六 後一・九六
 七七 後一・九七
 七八 後一・九八
 七九 後一・九九
 八〇 後一・一〇〇

七 アブの神アンモンの子孫の神ベリシテ人の神に事へエホバを棄て之に事へざりき エホバ烈しくイスラエルを
 八 怒りて之をベリシテ人及びアンモンの子孫の手に賣付したまへり 其年に彼らイスラエルの子孫を虐げ難せり
 九 ヨルダンの彼方においてギレアデにあるところのアモリ人の地に居るイスラエルの子孫十八年の間斯せられたり
 一〇 き アンモンの子孫またユダとベニヤミンとエフライムの族とを攻んとてヨルダンを渡りしかばイスラエル
 一〇 太く苦めり
 一一 こゝにおいてイスラエルの子孫エホバに呼りていひけるは我らおのれの神を棄てバアルに事へて汝に罪を
 一二 犯したりと エホバ、イスラエルの子孫にいひたまひけるは我かつてエジプト人アモリ人アンモンの子孫ベリ
 一三 シテ人より汝らを救ひ出せしにあらすや 又シドン人アマレク人及びマオン人の汝らを困しめしとき汝ら我に
 一四 呼りしかば我汝らを彼らの手より救ひ出せり 然るに汝ら我を棄て他の神に事ふれば我かかねて汝らを救はざ
 一五 るべし 汝らが擇める神々に往て呼れ汝らの艱難のときに之をして汝らを救はしめよ イスラエルの子孫
 一六 エホバに言けるは我ら罪を犯せりすべて汝の目に善と見るところを我らになしたまへねがはくは唯今日我らを
 一七 救ひたまへと 而して民おのれの中より異なる神々を取除きてエホバに事へたりエホバの心イスラエルの艱難
 一八 を見るに忍びずなりぬ
 一九 茲にアンモンの子孫集てギレアデに陣を取りしがイスラエルの子孫は聚りてミツバに陣を取り 時に民
 二〇 ギレアデの群伯たがひにいひけるは誰かアンモンの子孫に打ちむかひて戦を始むべき人ぞ其人をギレアデのすべ
 二一 ての民の首となすべしと

第一章

一 ギレアデ人エフタはたけき勇士にして妓婦の子なりギレアデ、エフタをうましめしなり
 二 アデの妻子等をうみしが妻の子等成長におよびてエフタをおひいだしてこれにいひけるは汝は
 三 他の婦の子なればわれらが父の家を嗣べきにあらずと エフタ其の兄弟の許より逃さりてトブの地に住けるに
 四 遊蕩者エフタのもとに集ひ來りて之ともに出ることをなせり
 五 程經てのちアンモンの子孫イスラエルとたゝかふに至りしが
 六 アンモンの子孫のイスラエルとたゝかへ
 七 るときにギレアデの長老等ゆきてエフタをトブの地より携來らんとし
 八 エフタにいひけるは汝來りて吾らの
 九 大將となれ我らアンモンの子孫とたゝかはん
 一〇 エフタ、ギレアデの長老等にいひけるは汝らは我を惡みてわが
 一一 父の家より逐いだしたるにあらずやしかるに今汝らが艱める時に至りて何ぞ我に來るや
 一二 ギレアデの長老等
 一三 エフタにこたへけるは其がために我ら今汝にかへる汝われらともゆきてアンモンの子孫とたゝかはすすべて
 一四 我等ギレアデにすめるもの首領となすべしと
 一五 エフタ、ギレアデの長老等にいひけるは汝らもし我をたづさ
 一六 へかへりてアンモンの子孫とたゝかはしめんエホバ之を我に付したまはゞ我は汝らの首となるべし
 一七 ギレア
 一八 デの長老等エフタにいひけるはエホバ汝と我との間の證者たり我ら誓つて汝の言のごとくなすべし
 一九 是に於
 二〇 てエフタ、ギレアデの長老等とともに往くに民之を立ておのれの首領となせりエフタすなはちミヅバ
 二一 においてエホバのまへにこの言をことごとく陳たり
 二二 かくてエフタ、アンモンの子孫の王に使者をつかはしていひけるは汝と我の間に何事ありてか汝われに攻
 二三 めきたりてわが地に戰はんとする
 二四 アンモンの子孫の王エフタの使者に答へけるはむかしイスラエル、エジブ

トより上りきたりし時にアルノンよりヤボクにいたりヨルダンに至るまで吾が土地を奪ひしが故なり然ば今穩便
 二四 に之を復すべし
 二五 エフタまた使者をアンモンの子孫の王に遣りて之にいはせけるは
 二六 エフタ斯いへりイスラ
 二七 エルはモアブの地を取すまたアンモンの子孫の地をも取ざりしなり
 二八 夫イスラエルはエジプトより上りきたれ
 二九 るときに曠野を経て紅海に到りカデシに來れり
 三〇 而してイスラエル使者をエドムの王に遣して言けるはねがは
 三一 くは我をして汝の土地を経過しめよと然るにエドムの王之をうけがはずまたおなじく人をモアブの王に遣したれ
 三二 ども是もうべなはざりしかばイスラエルはカデシに留まりしが
 三三 遂にイスラエル曠野を経てエドムの地および
 三四 モアブの地を繞りモアブの地の東の方に出でアルノンの彼方に陣を取り然どモアブの界には入らざりきアルノン
 三五 はモアブの界なればなり
 三六 かくてイスラエル、ヘシボンに王たりしアモリ人の王シホンに使者を遣せりすなは
 三七 ちイスラエル之にいひけらくねがはくは我らをして汝の土地を経過てわがところにいならしめよと
 三八 然るにシ
 三九 ホン、イスラエルを信ぜずしてその界をとほらしめずかへつてそのすべての民を集めてヤハツに陣しイスラエル
 四〇 とたゝかひしが
 四一 イスラエルの神エホバ、シホンとそのすべての民をイスラエルの手に付したまひたればイス
 四二 ラエル之を撃取りてその土地にすめるアモリ人の地を悉く手に入れ
 四三 アルノンよりヤボクに至るまでまた曠野
 四四 よりヨルダンに至るまですべてアモリ人の土地を手に入たり
 四五 斯のごとくイスラエルの神エホバは其の民イス
 四六 ラエルのまへよりアモリ人を逐しりぞけたまひしに汝なほ之を取んとする乎
 四七 汝は汝の神ケモンが汝に取し
 四八 むるものを取ざらんやわれらは我らの神エホバが我らに取しむる物を取ん
 四九 汝は誠にモアブの王チツボルの子
 五〇 バラクにまされる處ありとするかバラク曾てイスラエルとあそひしことありや曾て之とたゝかひしことありや

イ 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 二 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 三 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 四 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 五 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 六 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 七 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 八 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 九 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 一〇 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 一一 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 一二 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 一三 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 一四 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 一五 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 一六 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 一七 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 一八 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 一九 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 二〇 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 二一 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 二二 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 二三 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 二四 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 二五 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 二六 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 二七 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 二八 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 二九 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 三〇 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 三一 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 三二 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 三三 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 三四 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 三五 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 三六 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 三七 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 三八 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 三九 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 四〇 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 四一 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 四二 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 四三 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 四四 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 四五 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 四六 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 四七 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 四八 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 四九 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 五〇 一・一三 王下五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇

一〇 事をなせりマノアとその妻之を視る すなはち火燄壇より天にあがれるときエホバの使者壇の火燄のうちにありて昇れりマノアと其の妻これを視をりて地にひれふせり
 一一 エホバの使者そののち重ねてマノアと其の妻に現はれざりきマノアつひに彼がエホバの使者たりしを曉れり
 一二 茲にマノアその妻にむかひ我ら神を視たれば必ず死ぬるならんといふに 其の妻之にいひけるはエホバもし我らを殺さんとおもひたまはゞわれらの手より燔祭及び素祭をうけたまはざりしならんまたこれらの諸のこゝとを我らに示すことをなしたたびのごとく我らに斯ることを告たまはざりしなるべしと かくて婦子を産てその名をサムソンと呼べりその子育ち行くエホバこれを恵みたまふ エホバの靈ゾラとエシタオルのあひだなるマハネダンにて始て感動す

第一四章

一 サムソン、テムナテに下り、ベリシテ人の女にてテムナテに住るひとりの婦を見 歸り上りておのが父母に語ていひけるは我ベリシテ人の女にてテムナテに住るひとりの婦を見たりされば今之をめとりてわが妻とせよと その父母之にいひけるは汝ゆきて割禮を受けざるベリシテ人のうちより妻を迎んとするは汝が兄弟等の女のうちもしくはわがすべての民のうちに婦女無が故なるかとしかるにサムソン父にむかひ彼婦わがこゝろに適へば之をわがために娶れと言ひ 其の父母はこの事のエホバより出しなるを知ざりきサムソンはベリシテ人を攻んと鬻をうかゞひしなりそは其のころベリシテ人イスラエルを轄め居たればなりサムソン父母とともにテムナテに下りてテムナテの葡萄園にいたるに稚き獅子咆哮りて彼に向ひしが
 六 エホバの靈彼にのぞみたれば山羊羔を裂がごとくに之を裂たりしが手には何の武器も持ざりきされどサムソン

一利九・二四 代上 二六 士六・二二 一八〇・二五二 ト書一五・三三 士一三・八・一三 香ル創二・二一、三四 三四・六中七三
 二一・二六 結一 八創三三・三〇 出 二來一・三二 一八・一一 一五・二二 一五・二二 一五・二二 一五・二二 一五・二二
 二八 本一七六 三三・二〇 申五 本申三・一九 路一 一三・六 大四二 士一八・一一 又創三四・二〇 一四 出 一四 一四 一四 一四 一四 一四
 一五・二二・七 四八 二五・三〇 申二八 二五・三〇、一三 一七・一〇、一三 一七・一〇、一三 一七・一〇、一三 一七・一〇、一三 一七・一〇、一三
 一七・一〇、一三 一七・一〇、一三 一七・一〇、一三 一七・一〇、一三 一七・一〇、一三 一七・一〇、一三 一七・一〇、一三 一七・一〇、一三 一七・一〇、一三 一七・一〇、一三

七 はその爲せしことを父にも母にも告すしてありぬ サムソンつひに下りて婦とうちかたらひしが婦その心にかなへり かくて日を経て後サムソンかれを娶らんとて立かへりしが身を轉して彼の獅子の屍を見るに獅子の體に蜂の群と蜜とありければ すなはちその蜜を手にとりて歩みつゝ食ひ父母の許にいたりて之を與へけるに彼ら之を食へりされど獅子の體よりその蜜を取來れることをば彼らにかたらざりき
 一〇 斯て其の父下りて婦のもとに至りしかばサムソン少年の習例にしたがひてそこに饗宴をまうけたるに
 一一 サムソンを見て三十人の者をつれ來りて之が伴侶とならしむ サムソンかれらにいひけるは我汝らにひとつの隠語をかけん汝ら七日の筵宴の内に之を解てあきらかに之を我に告なば我汝らに裏衣三十と衣三十襲をあたふべし 然どもし之をわれに告得ずば汝ら我に裏衣三十と衣三十襲を與ふべしと彼等之にいひけるは汝の隠語をかけて我らに聽しめよ サムソン之にいひけるは食ふ者より食物出で強き者より甘き物出でたりと彼ら三日の中に之を解ことあたはざりしかば
 一五 第七日にいたりてサムソンの妻にいひけるは汝の夫を説すゝめて隠語を我らに明さしめよ然せずば火をもて汝と汝の父の家を焚ん汝らはわれらの物をとらんとてわれらを招けるなるか然るにあらずやと 是においてサムソンの妻サムソンのまへに泣いていひけるは汝はわれを惡む而已われを愛せざるなり汝わが民の子孫に隠語をかけて之をわれに説あかさすとサムソン之にいふ我これをわが父や母にも説あかさざればいかで汝に説あかさすべけんやと 婦七日の筵宴のあひだ彼のまへに泣き居りしが第七日に至りてサムソンつひに之を彼に説あかせり其は太く強たればなり婦すなはち隠語をおのが民の子孫に明せり 是において第七日に及びて日の没るまへに

邑の人々サムソンにいひけるは何ものか蜜よりあまからん何ものか獅子より強からんとサムソン之にいひけるは
 汝らわが牝犢をもて耕さざりしならばわが隠語を解得ざるなりと 茲にエホバの靈サムソンに臨みしかばサム
 ソン、アシケロンに下りてかしこの者三十人を殺しその物を奪ひ彼の隠語を解し者等にその衣服を與へはげしく
 怒りて其父の家にかへり上れり サムソンの妻はサムソンの友となり居たるその伴侶の妻となりぬ

第一章

日を経てのち麥秋の時にサムソン山羊羔をたづさへて妻のもとを訪ていひけるは我室に入りてわが
 妻に會んと然るに妻の父其の入ことをゆるさず 其父すなはちいひけるはわれまことに汝は彼の

婦を嫌ひたりと意ひしがゆゑに彼を汝の伴侶たりし者に與へたり彼が妹は彼よりも善にあらずやねがはくは彼に
 代て之を汝のものとなせよ サムソン彼らにいひけるは今回はわれベリシテ人に害を加ふるも彼らに對して罪
 なかるべしと サムソンすなはち往て山犬三百をとらへ火炬をとり尾と尾をあはせてその二つの尾の間に一つ
 の火炬を結びつけ 火炬に火をつけてベリシテ人のいまだ刈ざる麥のなかにこれを放ち入れその束ね積たる
 ものといまだ刈ざるものを焚き橄欖の園にまで及ぼせり ベリシテ人いひけるは是は誰の行爲なるやこたへて
 言ふテムナテ人の婿サムソンなりそは彼サムソンの妻をとりて其伴侶なりし者に與へたればなりとこゝにおいて
 ベリシテ人上りきたりて彼の婦とその父とを火にて燒きうしなへり サムソンかれらに言ふ汝ら斯おこなへば
 我汝らに仇をむくはでは止じと すなはち脛に腿に彼らを撃て大いに之を殺せりかくてサムソンは下りてエタ
 ムの巖間に居る

こゝにおいてベリシテ人上り來りてユダに陣を取りレヒに布き備へたれば ヲダの人々いひけるは汝ら

イ士三三・一〇、一三、ハ士一五・二
 二五、ニ士一四・二〇
 一五・二九、ホ士一四・二五
 へ士一五・一九
 ト士一四・四、リ和二六・八、番三三
 士三三・一〇、一四、又和三三・七、二〇、七三、三三、四〇、二九
 ヲ和三四・六、ヲ和三四・六、ヲ和三四・六

何の故にわれらに攻めのぼりたるやとかれらこたへけるはサムソンをしばりて彼がわれらに爲しごとくかれに
 爲んとてのぼれるなりと 是をもてユダの人三千人エタムの巖間にくだりてサムソンにいふ汝ベリシテ人は
 われらを轄るものなるを知らざるや汝などてかわれらに斯る事をなせしやサムソンかれらにいひけるは我は彼ら
 が我に爲しごとく彼らに爲しなりと かれらまたサムソンにいひけるは我らは汝をしばりてベリシテ人の手に
 わたさんとて下りきたれりサムソンかれらにいひけるは汝らの自われを害すまじきことを我に誓へ 彼ら之に
 かたりていふいなわれらはたゞ汝を縛りいましめてベリシテ人の手にわたさんのみわれらは必らず汝を殺さざる
 べしとすなはち二條の新しき素をもてかれをいましめて巖より之を携かへれり

サムソン、レヒに至れるときベリシテ人聲を揚てかれに近づきしが時しもエホバの靈彼にのぞみたれば
 その腕にかゝれる素は火に焚たる麻のごとくになりて手のいましめ解はなれたり サムソンすなはち驢馬の
 あたらしき腮骨ひとつを見出し手をとて之を取り其をもて一千人を殺し 而して言ふ驢馬の腮骨をもて山を
 きづき山をつくる驢馬の腮骨をもて我一千人を撃殺せりと かく言終りてその手より腮骨をうちすて其處を
 ラマテレヒと名けたり 時に彼渴をおぼゆること甚だしかりしかばエホバによははりていふ汝のしもべの手を
 もて汝この大なる拯をほどこしたまへるにわれ今渴きて死に割禮を受けざるものの手におちいらんとすと
 こゝにおいて神レヒに在るくぼめる所を裂きたまひしかば水そこよりながれいでしがサムソン之を飲たれば
 精神奮に返りてふたゞび爽になりぬ故に其名をエンハツコレ(呼はれるもの)の泉と呼ぶ是今日にいたるまでレヒ
 に在り サムソンはベリシテ人の治世の時に二十年イストラエルをさばけり
 第一十六章 サムソン、ガザに往きかしこにてひとりの妓を見てその處に入しに サムソンこゝに來れり

三三 茲にペリシテ人の群伯共にあつまりてその神ダゴンに大なる祭物をさし上げて祝をなさんとしすなはち言ふ
 三四 われらの神はわれらの敵サムソンをわれらの手に付したりと 民サムソンを見ておのれの神をほめたゝへて言
 三五 ふわれらの神はわれらの敵たる者われらの地を荒せしものわれらを數多殺せしものをわれらの手に付したりと
 三六 その心に喜びていひけるはサムソンを召てわれらのために戯技をなさしめよとて囚獄よりサムソンを召いだ
 三七 せしかばサムソン之がために戯技をなせり彼等サムソンを柱の間に立しめしに サムソンおのが手をひきをる
 三九 少者にいひけるはわれをなして此家の倚て立ところの柱をさぐりて之に倚しめよと その家には男女充ち
 四〇 ペリシテ人の群伯もまたみな其處に居る又屋蓋のうへには三千ばかりの男女をりてサムソンの戯技をなすを觀て
 ありき

二八 時にサムソン、エホバに呼はりいひけるはあゝ主エホバよねがはくは我を記念えたまへ嗚呼神よねがはく
 二九 は唯今一度我を強くしてわがふたつの眼のひとつのためにだにもペリシテ人に仇をむくいしめたまへと サム
 三〇 ソンすなはちその家の倚てたつところの兩箇の中柱のひとつを右の手にて左の手にかゝへて身をこれによせ
 三二 たりしが サムソン我はペリシテ人とともに死なんといひて力をきはめて身をかゞめたれば家はそのなかに居
 三三 る群伯とすべての民のうへに倒れたりかくサムソンが死るときに殺せしものは生けるときに殺せし者よりもおほ
 三四 かりき こののちサムソンの兄弟およびその父の家族ことごとく下りて之を取り携へるのぼりてゾラとエシタオ
 三五 ルのあひだなる其の父マノアの墓にはうむれりサムソンがイスラエルをさばきしは二十年なりき

第十七章 一 こゝにエフライムの山の人にて名をミカとよべるものありしが 二 その母に言けるは汝かつて

イ出五・四
ホ士九・二七
ホ士九・二八

二耶一五・一五
ホ士一三・二五

へ創一四・一九 得三
一・一〇

ト出二〇・四、二二
利一九・四
申三三・一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

ル出二九・九
王上 一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

申 一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

ツ士一七・二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

一 その千百枚の銀を取れしことを吾が聞ところにて詛ひて語りしが視よその銀はわが手に在り我之を取らざり
 二 母すなはちわが子よねがはくはエホバ汝に祝福をたまへと言り 彼千百枚の銀をその母にかへせしかば母いひ
 三 けらくわれわが子のためにひとつの像を鑄みひとつの像を鑄んためにその銀をわが手よりエホバに納む然ばわれ
 四 今之を汝にかへすべしと ミカその銀を母にかへせしかば母その銀二百枚をとりて之を鑄物師にあたへてひと
 五 つの像をきさませひとつの像を鑄させたり其像はミカの家に在り 此のミカといふ人神の殿をもちをりエホバ
 六 およびテラビムを造りひとりの子を立ておのが祭司となせり 此のときはイスラエルに王なかりければ人々
 七 おのれの目に是とみゆることをおこなへり

八 こゝにひとり少者ありてベテレヘムユダに於てユダの族の中にをる彼はレビ人にしてかしこに寓居るな
 九 り この人居べきところをたづねてその邑ベテレヘムユダを去しが遂に旅してエフライムの山にゆきてミカの
 一〇 家にいたりしに ミカ之にいひけるは汝いづこより來れるやと彼之にいふ我はベテレヘムユダのレビ人なるが
 一一 居べきところをたづねに往くものなり ミカ之に言けるは汝われと偕に居りわがために父とも祭司ともなれよ
 一二 然ばわれ年に銀十枚および衣服食物を汝にあたへんとレビ人すなはち入しが 一三 レビ人つひにその人と偕に居ん
 一四 ことを肯ふ是においてその少者はかれの子の一人のごとくなりぬ 一五 ミカ、レビ人なるこの少者をたてて祭司と
 一六 なしたればすなはちミカの家に入る 一七 ミカこゝにおいて言ふ今われ知るエホバわれに恩恵をたまはんそはこの
 一八 レビ人われの祭司となればなり

第十八章

當時イスラエルには王なかりしがダン人の支派其頃住むべき地を求めたり是は彼らイスラエルの

にイスラエルの子孫起あがりてベテルにのほり神に問て我等の中孰か最初にのほりてベニヤミンの子孫と戦ふべきやと言ふにエホバ、ユダ最初にと言たまふ

二〇 一 九 イスラエルの子孫すなはち朝おきてギベアにむかひて陣をとりけるが イスラエルの人々ベニヤミンと

二 戦はんとて出でゆきイスラエルの人行伍をたて、ギベアにて彼らと戦はんとしければ ベニヤミンの子孫

三 ギベアより進みいでて其日イスラエル人二萬二千を地に撃仆せり 然るにイスラエルの民の人々みづから奮ひ

四 その初の日に行伍をたてし所にまた行伍をたてたり 而してイスラエルの子孫上りゆきてエホバの前に夕暮

五 まで哭きエホバに問て言ふ我復進みよりて吾兄弟なるベニヤミンの子孫とたゝかふべきやとエホバ彼に攻のほれ

六 と言たまへり

二四 是に於てイスラエルの子孫次の日またベニヤミンの子孫の所に攻よするに ベニヤミンまた次の日ギベ

二五 アより進みて之にいであひ再びイスラエルの子孫一萬八千人を地に撃仆せり是みな劍をぬくところの者なりき

二六 斯在しかばイスラエルの子孫と民みな上りてベテルにいたりて哭き其處にてエホバの前に坐りその日の夕暮

二七 まで食を斷ち燔祭と酬恩祭をエホバの前に獻げ 而してイスラエルの子孫エホバにとへり(その頃は神の契約

二八 の櫃彼處にありて アロンの子エレアザルの子なるピネハス當時これに事へたり)即ち言けるは我またも出て

二九 わが兄弟なるベニヤミンの子孫とたゝかふべきや或は息べきやエホバ言たまふ上れよ明日はわれ汝の手にかれら

三〇 を付すべしと

二九 イスラエル是に於てギベアの周圍に伏兵を置き 而してイスラエルの子孫三日目にまたベニヤミンの

三〇 子孫の所に攻のほり前のごとくにギベアにむかひて行伍をたてたれば ベニヤミンの子孫民に出あひしが遂に

三二 邑より誘出されたり彼等始は民を撃ち大路にて前のごとくイスラエルの民三十人許を殺せりその大路は一筋は

三三 ベテルにいたり一筋は野のギベアに至る ベニヤミンの子孫すなはち言ふ彼らは初のごとく我らに撃破らると

三三 然るにイスラエルの人は云ふ我等逃て彼らを邑より大路に誘き出さんと イスラエルの民みなその所を起て

三四 去りバアルタマルに行伍をたてたり而して伏兵その處より即ちギベアの野原より起れり イスラエルの全軍の

三五 中より選抜たる兵一萬來りてギベアを襲ひ其戰鬪はげしかりしがベニヤミン人は當害の己にのぞむを知らざりき

三六 エホバ、イスラエルのまへにベニヤミンを撃破りたまひしかばイスラエルの子孫その日ベニヤミン人二萬五

三六 千一人を殺せり是みな劍をぬくところの者なり

三六 ベニヤミンの子孫すなはち己の撃敗らるゝを見たり楮イスラエルの民そのギベアにむかひて設たるとこ

三六 所の伏兵を恃てベニヤミン人を避て退きけるが 伏兵急ぎてギベアに突いり伏兵進みて刃をもて邑を盡く撃り

三六 イスラエルの民とてその伏兵との間に定めたる合圖は邑より大なる黒烟をあげんとの事なりき イスラエ

三六 ルの人々戰陣より引き退ぞくベニヤミン初が程はイスラエルの民を撃て三十人許を殺し乃ち言ふ彼等はまこ

三六 とに最初の戦のごとく我等に撃やぶらると 然るに火焰の柱なして邑より上りはじめしかばベニヤミン人後

三六 を見かへりしに邑は皆烟となりて空にのぼる 時にイスラエルの民々ふりかへりしかばベニヤミンの人々當害

三六 のおのれに迫るを見て狼狽へ イスラエルの民々の前より身をめぐらして野の途におもむきけるが戰鬪これに

三六 追せまりて遂にその邑々よりいでたる者どもその中に戦死す イスラエルの民すなはちベニヤミン人を取りま

士 師 記 二〇・三十一—四三

四八九

きて之を追うち容易くこれを踏たふして東の方ギベアの對面にまでおよべり。ベニヤミンの仆る者一萬八千人是みな勇士なり。茲に彼等身をめぐらして野の方にげリンモンの磐にいたれりイスラエルの人大路にて彼等五千人を伐とり尙もこれを追うちてギドムにいたりその二千人を殺せり。是をもて其日ベニヤミンの仆れし者は劍をぬくところの人あはせて二萬五千なり是みな勇士なり。但六百人の者身をめぐらして野の方にのがれリンモンの磐にいたりて四月があひだリンモンの磐にをる。是に於てイスラエルの人々また身をかへしてベニヤミンの子孫をせめ刃をもて邑の人より畜にいたるまで凡て目にあたる者を撃ち亦その至るところの邑々に火をかけたなり。

第二章

イスラエルの人々曾てミツパにて誓ひ曰けるは我等の中一人もその女をベニヤミンの妻にあたふる者あるべからずと。茲に民ベテルにいたり彼處にて夕暮まで神の前に坐り聲を放ちて痛く哭き言けるはイスラエルの神エホバよなんぞイスラエルに斯ること起り今日イスラエルに一の支派の缺るにいたりしやと。而して翌日民蚤に起て其處に壇を築き燔祭と酬恩祭をさげたり。茲にイスラエルの子孫いひけるはイスラエルの支派の中に誰か會衆とともに上りてエホバにいたらざる者あらんと其はかれらミツパに來りてエホバにいたらざる者の事につきて大なる誓をたて、其人をばかならず死しむべしと言たればなり。イスラエルの子孫すなはち其兄弟ベニヤミンの事を惘然におもひて言ふ今日イスラエルに一の支派絶ゆ。我等エホバをさして我らの女をかれらの妻にあたへじと誓ひたれば彼の遺る者等に妻をめとらしめんには如何にすべきや。又言ふイスラエルの支派の中孰の者かミツパにのぼりてエホバにいたらざると而して視るにヤベシギレア

イ書一五・三二
ロ士一三・一三
一〇・一三
ニ士二〇・一八、二六
ホ書二四・二五
ト書一・二一、三二

ナ士二一・一五、二二
又書一八・一
ル士二〇・四七
ヲ申二〇・一〇
ワ士二二・一六
ヨ出二五・二〇
ヨ一・三三
ヨ三・一
ヨ一八・六
ヨ三・一

九 デよりは一人も陣營にきたり集會に臨める者なし。即ち民をかぞふるにヤベシギレアデの居民は一人も其處にをらざりき。是に於て會衆勇士一萬二千を彼處に遣し之に命じて言ふ往て刃をもてヤベシギレアデの居民を撃て婦女兒女をも餘すなかれ。汝ら斯おこなふべし即ち汝等男人および男と寝たる婦人を悉く滅し盡すべし。と。彼等ヤベシギレアデの居民の中に四百人の若き處女を獲たり是は未だ男と寝て男しりしことあらざる者なり彼らすなはち之をシロの陣營に曳きたる是はカナンの地にあり。斯て全會衆人を作りてリンモンの磐にをるベニヤミン人と語はしめ和睦をこれに宣しめたれば。ベニヤミンすなはち其時に歸りきたれり是において彼らヤベシギレアデの婦人中より生しおきたるところの女子を之にあたへけるが尙足ざりき。エホバ、イスラエルの支派の中に缺を生ぜしめたまひしに因て民ベニヤミンの事を惘然におもへり。

一六 會衆の長老等いひけるはベニヤミンの婦女絶たれば彼の遺れる者等に妻をめとらせんには如何すべきや。又言けるはベニヤミンの中の逃れたる者等に産業あらしめん然らばイスラエルに一の支派の消ることなかるべし。然ながら我等は我等の女子をかれらの妻にあたふべからず其はイスラエルの子孫誓をなしベニヤミンに妻を與ふる者は詛はれんと言たればなりと。而して言ふ歳々シロにエホバの祭ありと其處はベテルの北にあたりてベテルよりシケムにのぼるところの大路の東レバナの南にあり。是に於てかれらベニヤミンの子孫に命じて言ふ汝らゆきて葡萄園に伏して窺ひ。若シロの女等舞をどらんと出きたらば葡萄園より出でシロの女の中より各人妻を執てベニヤミンの地に往け。若その父あるひは兄弟來りて我らに懇へなば我らこれに言ふべし請ふ

二四 しことを汝らのために痛くうれふるなり 彼等また聲をあげて哭く而してオルバはその姑に接吻せしがルツは之を離れず

二五 是によりてナオミまたいひけるは視よ汝の姉はその民とその神にかへり往く汝も姉にしたがひてかへるべし
 二六 ルツいひけるは汝を棄て汝をはなれて歸ることを我に催すなかれ我は汝のゆくところに往き汝の宿るところにやどらん汝の民はわが民汝の神はわが神なり
 二七 汝の死るところに我は死て其處に葬らるべし若死別にあらずして我なんちとわかればエホバわれにかなし又かさねてかくなしたまへ
 二八 彼媳が固く心をさだめて己とともに來らんとするを見しかば之に言ふことを止たり

一九 かくて彼等二人ゆきて終にベテレヘムにいたりしがベテレヘムにいたれる時邑こぞりて之がためにさわぎたち婦女等ははナオミなるやといふ
 二〇 ナオミかれらにいひけるは我をナオミ(樂し)と呼なかれマラ(苦し)とよぶべし全能者痛く我を苦めたまひたればなり
 二一 我盈足て出たるにエホバ我をして空くなりて歸らしめたまふ
 二三 エホバ我を攻め全能者われをなやましたまふに汝等なんぞ我をナオミと呼や
 二四 スナオミそのモアブの地より歸れる媳モアブの女ルツとともに歸り來れり即ち彼ら大麥刈の初にベテレヘムにいたる

第二章

一 ナオミにその夫の知己あり即ちエリメレクの族にして大なる力の人なりその名をボアズといふ
 二 茲にモアブの女ルツ、ナオミにいひけるは請ふわれをして田にゆかしめよ我何人かの目のまへに恩をうるることあらばその人の後にしたがひて穂を拾はんとナオミ彼に女子よ往べしといひければ
 三 乃ち往き遂に至りて刈者の後にしたがひて田にて穂を拾ふ彼意はずもエリメレクの族なるボアズの田の中にいたれり

イ 一七・一七、一八 ハ 香二四・一五、一九 二王下二・二四、六
 ロ 二二・二四 王下二・二四、六 二王下二・二四、六
 一六 一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

六五 ボアズ、ベテレヘムより來りその刈者等に言ふねがはくはエホバ汝等とともに在せと彼等すなはち答てねがはくはエホバ汝を祝たまへといふ
 七 へて言ふ是はモアブの女にしてモアブの地よりナオミとともに還りし者なるが
 八 したがひて禾束の間に穂をひろひあつめしめよと而して來りて朝より今にいたるまで此にあり其家にやすみし間は暫時のみ

八 ボアズ、ルツにいひけるは女子よ聽け他の田に穂をひろひにゆくなかれ又此よりいづるなかれわが婢等に離すして此にをるべし
 九 人々の刈ところの田に目をとめてその後にしたがひゆけ我少者等に汝にさはるなかれと命ぜしにあらすや汝渴く時は器の所にゆきて少者の汲るを飲めと
 一〇 彼すなはち伏て地に拜し之にいひけるは我如何して汝の目の前に恩恵を得たるかなんぢ異邦人なる我を顧みると
 一一 ボアズこたへて彼にいひけるは汝が夫の死たるより已來 姑に盡したる事汝がその父母および生れたる國を離れて見ず識すの民に來りし事皆われに聞えたり
 一二 ねがはくはエホバ汝の行爲に報いたまへねがはくはイスラエルの神エホバ即ち汝がその翼の下に身を寄んとて來れる者汝に十分の報施をたまはんことを
 一三 彼にいひけるは主よ我をして汝の目の前に恩をえせしめたまへ我は汝の仕女の一人にも及ざるに汝かく我を慰め斯仕女に懇切に語りたまふ
 一四 ボアズかれにいひけるは食事の時は此にきたりてこのパンを食ひ且汝の食物をこの醋に濡せよと彼すなはち刈者の傍に坐しければボアズ烘麥をかれに與ふ彼くらひて飽き其餘を懷む
 一五 かくて彼また穂をひろはんとて起あがりければボアズその少者に命じていふ彼をして禾束の間にても穂をひろはしめよかれを羞しむるなかれ

三 いひければ則ち坐す 時に彼の贖業人にいひけるはモアブの地より還りしナオミ我等の兄弟エリメレクの地
 四 を賣る 我汝につげしらせて此に坐する人々の前わが民の長老の前にて之を買へと言んと想へり汝もし之を
 贖はんとおもはゞ贖ふべし然どもし之を贖はずば吾に告てしらしめよ汝の外に贖ふ者なければなり我はなんぢの
 次なりと彼我これを贖はんといひければ 五 ボアズいふ汝ナオミの手よりその地を買ふ日には死者の妻なりし
 六 モアブの女ルツをも買て死者の名をその産業に存すべきなり 贖業人いひけるは我はみづから贖ふあたはず
 七 恐くはわが産業を壞はん汝みづから我にかはりてあがなへ我あがなふことあたはざればなりと
 八 昔イスラエルにて物を贖ひ或は交易んとする事につきて萬事を定めたる慣例は斯のごとし即ち此人鞋を脱
 九 いひてその鞋を脱たり 九 ボアズ長老および諸の民にいひけるは汝等今日見證をなす我エリメレクの凡の所有
 一〇 およびキリオンとマロンの凡の所有をナオミの手より買たり 我またマロンの妻なりしモアブの女ルツを買て
 妻となし彼死者の名をその産業に存すべし是かの死者の名をその兄弟の中とその處の門に絶ざらしめんため
 二 なり汝等今日證をなす 門にをる人々および長老等いひけるはわれら證をなす願くはエホバ汝の家にいとこ
 三 ろの婦人をして彼イスラエルの家を造りなしたるラケルとレアの二人のごとくならしめたまはんことを願くは
 汝エフラタにて能を得ベレヘムにて名をあげよ ねがはくはエホバが此若き婦よりして汝にたまはんところ
 四 の子に由て汝の家かのタマルがユダに生たるベレズの家のごとくなるにいたれ 斯てボアズ、ルツを娶りて妻となし彼の所にいりければエホバ彼を孕ましめたまひて彼男子を生り

一四 婦人等ナオミにいひけるはエホバは讃べきかな汝を遺すして今日汝に贖業人あらしめたまふその名イスラエ
 一五 ルに揚れ 彼は汝の心をなぐさむる者汝の老を養ふ者とならん汝を愛する汝の媳即ち七人の子よりも汝に
 一六 善もの之をうみたり ナオミその子をとりにて之を懐に置き之が養育者となる 一七 その隣人なる婦女等これに
 一八 名をつけて云ふナオミに男子うまれたりと其名をオベデと稱し彼はダビデの父なるエサイの父なり

一八 一八 備ベレツの系圖は左のごとし 一八 一八 備ベレツ、ヘヅロンを生み 一九 一八 備ベレツ、ラムを生み 一九 一八 備ベレツ、ラムを生み
 一九 一八 備ベレツ、ラムを生み 一九 一八 備ベレツ、ラムを生み 一九 一八 備ベレツ、ラムを生み 一九 一八 備ベレツ、ラムを生み
 二〇 一八 備ベレツ、ラムを生み 二〇 一八 備ベレツ、ラムを生み 二〇 一八 備ベレツ、ラムを生み 二〇 一八 備ベレツ、ラムを生み
 二一 一八 備ベレツ、ラムを生み 二一 一八 備ベレツ、ラムを生み 二一 一八 備ベレツ、ラムを生み 二一 一八 備ベレツ、ラムを生み
 二二 一八 備ベレツ、ラムを生み 二二 一八 備ベレツ、ラムを生み 二二 一八 備ベレツ、ラムを生み 二二 一八 備ベレツ、ラムを生み
 二三 一八 備ベレツ、ラムを生み 二三 一八 備ベレツ、ラムを生み 二三 一八 備ベレツ、ラムを生み 二三 一八 備ベレツ、ラムを生み
 二四 一八 備ベレツ、ラムを生み 二四 一八 備ベレツ、ラムを生み 二四 一八 備ベレツ、ラムを生み 二四 一八 備ベレツ、ラムを生み
 二五 一八 備ベレツ、ラムを生み 二五 一八 備ベレツ、ラムを生み 二五 一八 備ベレツ、ラムを生み 二五 一八 備ベレツ、ラムを生み
 二六 一八 備ベレツ、ラムを生み 二六 一八 備ベレツ、ラムを生み 二六 一八 備ベレツ、ラムを生み 二六 一八 備ベレツ、ラムを生み
 二七 一八 備ベレツ、ラムを生み 二七 一八 備ベレツ、ラムを生み 二七 一八 備ベレツ、ラムを生み 二七 一八 備ベレツ、ラムを生み
 二八 一八 備ベレツ、ラムを生み 二八 一八 備ベレツ、ラムを生み 二八 一八 備ベレツ、ラムを生み 二八 一八 備ベレツ、ラムを生み
 二九 一八 備ベレツ、ラムを生み 二九 一八 備ベレツ、ラムを生み 二九 一八 備ベレツ、ラムを生み 二九 一八 備ベレツ、ラムを生み
 三〇 一八 備ベレツ、ラムを生み 三〇 一八 備ベレツ、ラムを生み 三〇 一八 備ベレツ、ラムを生み 三〇 一八 備ベレツ、ラムを生み
 三一 一八 備ベレツ、ラムを生み 三一 一八 備ベレツ、ラムを生み 三一 一八 備ベレツ、ラムを生み 三一 一八 備ベレツ、ラムを生み
 三二 一八 備ベレツ、ラムを生み 三二 一八 備ベレツ、ラムを生み 三二 一八 備ベレツ、ラムを生み 三二 一八 備ベレツ、ラムを生み
 三三 一八 備ベレツ、ラムを生み 三三 一八 備ベレツ、ラムを生み 三三 一八 備ベレツ、ラムを生み 三三 一八 備ベレツ、ラムを生み
 三四 一八 備ベレツ、ラムを生み 三四 一八 備ベレツ、ラムを生み 三四 一八 備ベレツ、ラムを生み 三四 一八 備ベレツ、ラムを生み
 三五 一八 備ベレツ、ラムを生み 三五 一八 備ベレツ、ラムを生み 三五 一八 備ベレツ、ラムを生み 三五 一八 備ベレツ、ラムを生み
 三六 一八 備ベレツ、ラムを生み 三六 一八 備ベレツ、ラムを生み 三六 一八 備ベレツ、ラムを生み 三六 一八 備ベレツ、ラムを生み
 三七 一八 備ベレツ、ラムを生み 三七 一八 備ベレツ、ラムを生み 三七 一八 備ベレツ、ラムを生み 三七 一八 備ベレツ、ラムを生み
 三八 一八 備ベレツ、ラムを生み 三八 一八 備ベレツ、ラムを生み 三八 一八 備ベレツ、ラムを生み 三八 一八 備ベレツ、ラムを生み
 三九 一八 備ベレツ、ラムを生み 三九 一八 備ベレツ、ラムを生み 三九 一八 備ベレツ、ラムを生み 三九 一八 備ベレツ、ラムを生み
 四〇 一八 備ベレツ、ラムを生み 四〇 一八 備ベレツ、ラムを生み 四〇 一八 備ベレツ、ラムを生み 四〇 一八 備ベレツ、ラムを生み

請ふ我にかくすなかれ汝もし其汝に告げたまひしところを一にてもかくすときは神汝にかくなし又かさねてかく
なしたまへ 一八 サムエル其事をことごとくしめて彼に隠すことなかりきエリいひけるは是はエホバなり其よし
と見たまふことをなしたまへと

一九 サムエルそだちぬエホバこれとともにいましてそのことばをして一も地におちざらしめたまふ 二〇
二一 リベエルシバにいたるまでイスラエルのみなサムエルがエホバの預言者とさだまれるをしれり 二二 エホバふた
たびシロにてあらはれたまふエホバ、シロにおいてエホバの言によりてサムエルにおのれをしめしたまふなり
サムエルの言あまねくイスラエル人におよぶ

第四章

一 イスラエル人ベリシテ人にいであひて戦はんとしエベネゼルの邊に陣をとりベリシテ人はアベク
に陣をとる 二 ベリシテ人イスラエル人にむかひて陣列をなせり戦ふにおよびてイスラエル人ベリ
シテ人のまへにやぶるベリシテ人戦場において其軍四千人ばかりを殺せり 三 民陣營にいたるにイスラエルの
長老曰けるはエホバ何故に今日我等をベリシテ人のまへにやぶりたまひしやエホバの契約の櫃をシロより此に
たづさへ來らん其櫃われらのうちに來らば我らを敵の手よりすくいいだすことあらんと 四 かくて民人をシロに
つかはしてケルビムの上に坐したまふ萬軍のエホバの契約の櫃を其處よりたづさへきたらしむ時にエリの二人の
子ホフニとビネハス神の契約のはことともに彼處にありき

五 エホバの契約の櫃陣營にいたりしときイスラエル人皆大によばはりさげびければ地なりひゞけり 六
シテ人嗚呼の聲を聞いていひけるはへブル人の陣營に起れる此大なるさげびの聲は何ぞやと遂にエホバの櫃の其陣

イ得一・一七 三九・八 二三
イ伯一・二二、二一 八母前二・二一 母前九六
〇 三九・九 二創三九・二二、二一、ヘ士三〇・一
ト母前三・一四 民七・八九
チ母前五・一七、二二 母前六・二 詩八〇
出二五・一八、二二 一、九九・一

イ得一・一七 三九・八 二三
イ伯一・二二、二一 八母前二・二一 母前九六
〇 三九・九 二創三九・二二、二一、ヘ士三〇・一
ト母前三・一四 民七・八九
チ母前五・一七、二二 母前六・二 詩八〇
出二五・一八、二二 一、九九・一

七 營にいたれるを知る 七 ベリシテ人おそれていひけるは神陣營にいたる又いひけるは嗚呼われら禍なるかな今に
いたるまで斯ることなかりき 八 あゝ我等 禍なるかな誰かわれらを是らの強き神の手よりすくいいださんや
九 此等の神は昔し諸の災を以てエジプト人を曠野に撃し者なり 九 ベリシテ人よ強くなり毫傑のごとく爲せへブ
ル人がかつて汝らに事へしごとく汝らこれに事ふるなかれ豪傑のごとく爲して戦へよ 一〇 かくてベリシテ人戦ひ
しかばイスラエル人やぶれて各々其天幕に逃かへる戦死はなはだ多くイスラエルの歩兵の仆れし者三萬人なりき
二 又神の櫃は奪はれエリの二人の子ホフニとビネハス殺さる 二
三 是日ベニヤミンの一人軍中より走來り其衣を裂き土をかむりてシロにいたる 二
四 其いたれる時エリ道の
傍に壇に坐して觀望居たり其心に神の櫃のことを思ひ煩らひたればなり其人いたり邑にて人々に告げれば邑
こそぞりてさげびたり 二四 エリ此呼號の聲をきゝていひけるは是喧嘩の聲は何なるやと其人いそぎたりてエリに
つぐ 二五 時にエリ九十八歳にして其目かたまりて見ることあたはず 二六 其人エリにいひけるは我は軍中より來れ
るもの我今日軍中より逃れたりエリいひけるは吾子よ事いかん 二七 使人答へていひけるはイスラエル人ベリシテ
人の前に逃げ且民の中に大なる戦死ありまた汝の二人の子ホフニとビネハスは殺され神の櫃は奪はれたり 二八 神
の櫃のことを演しときエリ其壇より仰げに門の傍におち頸をれて死ねり是はかれ老て身重かりければなり其イス
ラエルを鞠しは四十年なりき 二九
三〇 エリの媳ビネハスの妻孕みて子産ん時ちかゝりしが神の櫃の奪はれしと舅と夫の死にしとの傳言を聞し
かば其痛みおこりきたり身をかゝめて子を産り 三〇 其死なんとする時傍にたてる婦人これにいひけるは懼るゝ

二一 サムエル一の石をとりてミツバとセンの間に置きエホバは我らを助けたまへりといひて其名をエベネ
 二二 ゼル(助けの石)と呼ぶ 二二 ペリシテ人攻伏られて再びイスラエルの境にいらキサムエルの一生のあひだエホバの
 二三 手ペリシテ人をふせげり 二四 ペリシテ人のイスラエルより取たる邑々はエクロンよりガテまでイスラエルにかへ
 二五 りぬまた其周囲の地はイスラエル人これをペリシテ人の手よりとりかへせりまたイスラエル人とアモリ人と好を
 二六 むすべり 二七 サムエル一生のあひだイスラエルをさばき 二八 歳々ベテルとギルガルおよびミツバをめぐりて其處々にて
 二九 イスラエル人をさばき 三〇 またラマにかへり此處に其家あり此にてイスラエルをさばき又此にてエホバに壇を
 三一 きづけり

第八章

一 サムエル年老て其子をイスラエルの士師となす 二 兄の名をヨエルといひ弟の名をアビヤと
 三 いふベエルシバにありて士師たり 四 其子父の道をあゆまずして利にむかひ賄賂をとりて審判を
 五 曲ぐ 六 是においてイスラエルの長老みなあつまりてラマにゆきサムエルの許に至りて 七 これにいひけるは視よ
 八 汝は古い汝の子は汝の道をあゆまずさればわれらに王をたてよわれらを鞫かしめ他の國々のごとくならしめよと
 九 その我らに王をあたへて我らを鞫かしめよといふを聞てサムエルよろこばず而してサムエル、エホバにいのり
 一〇 しかば 一一 エホバ、サムエルにいひたまひけるは民のすべて汝にいふところのごとばを聽け其は汝を棄るにあら
 一二 ず我を棄て我をして其王とならざらしめんとするなり 一三 かれらはわがエジプトより救ひいだせし日より今日に

イ創二八・一八、三一〇 母前四・一
 四・四五、三五・一四、ハ十一・三一
 香四・九、二四・二六 二母前一三・五
 一母前七・六、一一、ト士二二・四
 一母前八・四、一六、一七、一八、二〇、二二、
 一母前八・四、一六、一七、一八、二〇、二二、
 一母前八・四、一六、一七、一八、二〇、二二、
 一母前八・四、一六、一七、一八、二〇、二二、

九 いたるまで我をすて、他の神につかへて種々の所行をなせしごとく汝にもまた然す 然れどもいま其言をきけ
 一〇 但し深くいさめて其治むべき王の常例をしめすべし

二〇 サムエル王を求むる民にエホバのことばをことごとく告て 二一 いひけるは汝等をさむる王の常例は斯の
 二二 ごとし汝らの男子をとり己れのために之をたて、車の御者となし騎兵となしまた其車の前驅となさん 二二 又
 二三 之をおのれの爲に千夫長 五十夫長となしまた其地をたがへし其作物を刈らしめまた武器と車器とを造らし
 二四 めん 二五 また汝らの女子をとりて製香者となし厨婢となし炙麵者となさん 二六 又汝らの田畝と葡萄園と橄欖園
 二七 の最も善きところを取て其臣僕にあたへ 二八 汝らの穀物と汝らの葡萄の什分一をとりて其官吏と臣僕にあたへ
 二九 また汝らの僕婢および汝らの最も善き牛と汝らの驢馬を取ておのれのために作かしめ 三〇 又汝らの羊の
 三一 十分一をとり又汝らを其僕となさん 三二 其日において汝等己のために擇みし王の事によりて呼號らんされど
 三三 エホバ其日に汝らに聽たまはざるべしと
 三四 然るに民サムエルの言にしたがふことをせずしていひけるは否われらに王なかるべからず 我らも他の
 三五 國々の如くなり我らの王われらを鞫きわれらを率て我らの戦にたゝかはん 三六 サムエル民のことばを盡く聞て
 三七 之をエホバの耳に告ぐ 三八 エホバ、サムエルにいひたまひけるはかれらのことばを聽きかれらのために王をたて
 三九 よサムエル、イスラエルの人々にいひけるは汝らのおの其邑にかへるべし

第九章

一 茲にベニヤミンの人にてキシと名くる力の大なるものありキシはアビエルの子アビエルはゼロン
 二 の子ゼロンはベコラテの子ベコラテはアビヤの子アビヤはベニヤミンの子なり 三 キシにサウルと

七 林叢に崗巒に高塔に坎阱にかくれたり また或るへブル人はヨルダンを渉りてガドとギレアデの地にいたる
 然るにサウルは尙ギルガルにあり民皆戰慄て之にしたがふ
 八 サウル、サムエルの定めし期にしたがひて七日とゞまりしがサムエル、ギルガルに來らず民はなれて散け
 れば サウルいひけるは燔祭と酬恩祭を我にもちきたれと遂に燔祭をさゝげたり 燔祭をさゝぐることを終
 二 じときに視よサムエルいたるサウル安否を問はんとてこれをいで迎ふに サムエルいひけるは汝何をなせしや
 サウルいひけるは我民の我をはなれてちりまた汝の定まれる日のうちに來らずしてペリシテ人のミクマシに集ま
 れるを見しかば 一三 ペリシテ人ギルガルに下りて我をおそはんに我いまだエホバをなごめずといひて勉て燔祭を
 一四 さゝげたり サムエル、サウルにいひけるは汝おろかなることをなせり汝その神エホバのなんちに命じたまひ
 一五 し命令を守らざりしなり若し守りしならばエホバ、イスラエルををさむる位を永く汝に定めたまひしならん
 然どもいま汝の位たもたざるべしエホバ其心に適ふ人を求めてエホバ之に其民の長を命じたまへり汝がエホ
 一六 バの命ぜしことを守らざるによる かくてサムエルたちてギルガルよりベニヤミンのギベアにのぼりいたる
 一七 サウルおのれとともにある民をかぞふるに凡そ六百人ありき サウルおよび其子ヨナタン並にこれと
 一八 の陣よりいで一隊はオフラの路にむかひてシユアルの地にいたり 一隊はベテホロン道の向ひ一隊は曠野の
 方にあるゼボイムの谷をのぞむ境の路にむかふ
 一九 時にイスラエルの地のうち何處にも鐵工なかりき是はペリシテ人へブル人の劍あるひは槍を作ること恐

イ 代下 一六・九
 ハ 代下 一五・二一
 ヲ 代下 一五・二八
 カ 代下 一三・一五
 タ 代下 二二・八
 ヲ 代下 二二・九
 ヲ 代下 二二・一〇
 ヲ 代下 二二・一一
 ヲ 代下 二二・一二
 ヲ 代下 二二・一三
 ヲ 代下 二二・一四
 ヲ 代下 二二・一五
 ヲ 代下 二二・一六
 ヲ 代下 二二・一七
 ヲ 代下 二二・一八
 ヲ 代下 二二・一九
 ヲ 代下 二二・二〇
 ヲ 代下 二二・二一
 ヲ 代下 二二・二二
 ヲ 代下 二二・二三
 ヲ 代下 二二・二四
 ヲ 代下 二二・二五
 ヲ 代下 二二・二六
 ヲ 代下 二二・二七
 ヲ 代下 二二・二八
 ヲ 代下 二二・二九
 ヲ 代下 二二・三〇
 ヲ 代下 二二・三一
 ヲ 代下 二二・三二
 ヲ 代下 二二・三三
 ヲ 代下 二二・三四
 ヲ 代下 二二・三五
 ヲ 代下 二二・三六
 ヲ 代下 二二・三七
 ヲ 代下 二二・三八
 ヲ 代下 二二・三九
 ヲ 代下 二二・四〇
 ヲ 代下 二二・四一
 ヲ 代下 二二・四二
 ヲ 代下 二二・四三
 ヲ 代下 二二・四四
 ヲ 代下 二二・四五
 ヲ 代下 二二・四六
 ヲ 代下 二二・四七
 ヲ 代下 二二・四八
 ヲ 代下 二二・四九
 ヲ 代下 二二・五〇
 ヲ 代下 二二・五一
 ヲ 代下 二二・五二
 ヲ 代下 二二・五三
 ヲ 代下 二二・五四
 ヲ 代下 二二・五五
 ヲ 代下 二二・五六
 ヲ 代下 二二・五七
 ヲ 代下 二二・五八
 ヲ 代下 二二・五九
 ヲ 代下 二二・六〇
 ヲ 代下 二二・六一
 ヲ 代下 二二・六二
 ヲ 代下 二二・六三
 ヲ 代下 二二・六四
 ヲ 代下 二二・六五
 ヲ 代下 二二・六六
 ヲ 代下 二二・六七
 ヲ 代下 二二・六八
 ヲ 代下 二二・六九
 ヲ 代下 二二・七〇
 ヲ 代下 二二・七一
 ヲ 代下 二二・七二
 ヲ 代下 二二・七三
 ヲ 代下 二二・七四
 ヲ 代下 二二・七五
 ヲ 代下 二二・七六
 ヲ 代下 二二・七七
 ヲ 代下 二二・七八
 ヲ 代下 二二・七九
 ヲ 代下 二二・八〇
 ヲ 代下 二二・八一
 ヲ 代下 二二・八二
 ヲ 代下 二二・八三
 ヲ 代下 二二・八四
 ヲ 代下 二二・八五
 ヲ 代下 二二・八六
 ヲ 代下 二二・八七
 ヲ 代下 二二・八八
 ヲ 代下 二二・八九
 ヲ 代下 二二・九〇
 ヲ 代下 二二・九一
 ヲ 代下 二二・九二
 ヲ 代下 二二・九三
 ヲ 代下 二二・九四
 ヲ 代下 二二・九五
 ヲ 代下 二二・九六
 ヲ 代下 二二・九七
 ヲ 代下 二二・九八
 ヲ 代下 二二・九九
 ヲ 代下 二二・一〇〇

二一〇 されたればなり 二一〇 イスラエル人皆其鋤 鋤斧 耒 即ち耒 鋤 三齒鋤 斧の綴に欠ありてこれを鍛ひ改さんとする
 二一一 時又は鞭を尖らさんとする時は常にペリシテ人の所にくだれり 是をもて戰の日にサウルおよびヨナタンと
 二一二 ともにある民の手には劍も槍も見えず只サウルと其子ヨナタンのみ持り 茲にペリシテ人の先陣ミクマシの
 渡口に進む

第一章

一 其時サウルの子ヨナタン武器を執る若者にいひけるはいざ對面にあるペリシテ人の先陣に渉り
 二 ゆかんと然ど其父には告ざりき 二 サウル、ギベアの極においてミグロンにある石榴の樹の下に住
 三 まりしが俱にある民はおよそ六百人なりき 又アヒヤ、エホデを衣てともにをるアヒヤはアヒトブの子アヒ
 四 トブはイカボデの兄弟イカボデはビネハスの子ビネハスはシロにありてエホバの祭司たりしエリの子なり民ヨ
 五 ナタンの行けるをしらざりき 四 ヨナタンの渉りてペリシテ人の先陣にいたらんとする渡口の間に此傍に巖
 六 あり彼傍にも巖あり一の名をボゼツといひ一の名をセネといふ 其一は北に向ひてミクマシに對し一は南に
 七 むかひてゲバに對す
 八 ヨナタン武器を執る少者にいふいざ我ら此割禮なき者どもの先陣にわたらんエホバ我らのためにはたらき
 九 たまふことあらん多くの人をもて救ふも少き人をもてすくふもエホバにおいては妨げなし 武器をとるもの之
 一〇 にいひけるは總て汝の心にあるところをなせ進めよ我汝の心にしたがひて汝とともにあり ヨナタンいひける
 一 一 は見よ我らかの人々のところにわたり身をかれらにあらはさん かれら若し我らが汝らにいたるまでとゞまれ
 二 と斯く我らには我らはこのまゝとゞまりてかれらの所にのぼらじ されど若し我らのところにのぼれと

二 かくいはゞ我らのぼらんエホバかれらを我らの手にわたしたまふなり是を徴となさんと 二
 三 シテ人の先陣にあらはしければペリシテ人いひけるは視よへブル人其かくれたる穴よりいで来ると 二
 四 先陣の人ヨナタンと其武器を執る者にこたへて我等の所に上りきたれ目に物見せんといひしかばヨナタン武器を
 五 執る者にいひけるは我にしたがひてのぼれエホバ彼らをイスラエルの手にわたしたまふなり 二
 六 ヨナタン攀のほり其武器を執るもの之にしたがふペリシテ人ヨナタンのまへに仆る武器をとる者も後にしたがひて之をころす
 七 がある陣のものおよび凡ての民の中に戦慄おこり先陣の人および劫掠人もまたをのゝき地ふるひ動けり是は神よりの
 八 戦慄なりき 一七
 九 ベニヤミンのギベアにあるサウルの戌卒望見しに視よペリシテ人の群衆くづれて此彼にちらばる 一七
 一〇 サウルおのれともなる民にいひけるは汝ら點驗て誰が我らの中よりゆきしかを見よとすなはちしらべたるに
 一一 ヨナタンとその武器を執るもの居らざりき サウル、アヒヤにエポテを持きたれといふ其はかれ此時イスラエ
 一二 ルのまへにエポテを著たれば也 サウル祭司にかたれる時ペリシテ人の軍の騒いよいよましたりければサウル
 一三 祭司にいふ姑く汝の手を措けと かくてサウルおよびサウルと共にある民皆呼はりて戦ひに至るにペリシテ人
 一四 おのおの劍を以て互に相撃ちければ其敗績はなはだ大なりき 二
 一五 ペリシテ人と共に上りて陣に来るところのへブル人もまた翻へりてサウルおよびヨナタンと共にあるイスラエル
 一六 人に合せり 又エフライムの山地にかくれたるイスラエル人皆ペリシテ人の逃るを聞てまた戦ひに出て之を追

イ創二四・一四 士七 一王下七・七 伯一八 ホ創三五・五 士七・二二 代下
 一 二〇・二二 二
 二 二〇・二二 二
 三 二〇・二二 二
 四 二〇・二二 二
 五 二〇・二二 二
 六 二〇・二二 二
 七 二〇・二二 二
 八 二〇・二二 二
 九 二〇・二二 二
 一〇 二〇・二二 二
 一一 二〇・二二 二
 一二 二〇・二二 二
 一三 二〇・二二 二
 一四 二〇・二二 二
 一五 二〇・二二 二
 一六 二〇・二二 二
 一七 二〇・二二 二
 一八 二〇・二二 二
 一九 二〇・二二 二
 二〇 二〇・二二 二
 二一 二〇・二二 二
 二二 二〇・二二 二
 二三 二〇・二二 二
 二四 二〇・二二 二
 二五 二〇・二二 二
 二六 二〇・二二 二
 二七 二〇・二二 二
 二八 二〇・二二 二
 二九 二〇・二二 二
 三〇 二〇・二二 二
 三一 二〇・二二 二
 三二 二〇・二二 二
 三三 二〇・二二 二
 三四 二〇・二二 二
 三五 二〇・二二 二
 三六 二〇・二二 二
 三七 二〇・二二 二
 三八 二〇・二二 二
 三九 二〇・二二 二
 四〇 二〇・二二 二
 四一 二〇・二二 二
 四二 二〇・二二 二
 四三 二〇・二二 二
 四四 二〇・二二 二
 四五 二〇・二二 二
 四六 二〇・二二 二
 四七 二〇・二二 二
 四八 二〇・二二 二
 四九 二〇・二二 二
 五〇 二〇・二二 二
 五一 二〇・二二 二
 五二 二〇・二二 二
 五三 二〇・二二 二
 五四 二〇・二二 二
 五五 二〇・二二 二
 五六 二〇・二二 二
 五七 二〇・二二 二
 五八 二〇・二二 二
 五九 二〇・二二 二
 六〇 二〇・二二 二
 六一 二〇・二二 二
 六二 二〇・二二 二
 六三 二〇・二二 二
 六四 二〇・二二 二
 六五 二〇・二二 二
 六六 二〇・二二 二
 六七 二〇・二二 二
 六八 二〇・二二 二
 六九 二〇・二二 二
 七〇 二〇・二二 二
 七一 二〇・二二 二
 七二 二〇・二二 二
 七三 二〇・二二 二
 七四 二〇・二二 二
 七五 二〇・二二 二
 七六 二〇・二二 二
 七七 二〇・二二 二
 七八 二〇・二二 二
 七九 二〇・二二 二
 八〇 二〇・二二 二
 八一 二〇・二二 二
 八二 二〇・二二 二
 八三 二〇・二二 二
 八四 二〇・二二 二
 八五 二〇・二二 二
 八六 二〇・二二 二
 八七 二〇・二二 二
 八八 二〇・二二 二
 八九 二〇・二二 二
 九〇 二〇・二二 二
 九一 二〇・二二 二
 九二 二〇・二二 二
 九三 二〇・二二 二
 九四 二〇・二二 二
 九五 二〇・二二 二
 九六 二〇・二二 二
 九七 二〇・二二 二
 九八 二〇・二二 二
 九九 二〇・二二 二
 一〇〇 二〇・二二 二

又出四・三〇 一王下七・七 伯一八 ホ創三五・五 士七・二二 代下
 一 二〇・二二 二
 二 二〇・二二 二
 三 二〇・二二 二
 四 二〇・二二 二
 五 二〇・二二 二
 六 二〇・二二 二
 七 二〇・二二 二
 八 二〇・二二 二
 九 二〇・二二 二
 一〇 二〇・二二 二
 一一 二〇・二二 二
 一二 二〇・二二 二
 一三 二〇・二二 二
 一四 二〇・二二 二
 一五 二〇・二二 二
 一六 二〇・二二 二
 一七 二〇・二二 二
 一八 二〇・二二 二
 一九 二〇・二二 二
 二〇 二〇・二二 二
 二一 二〇・二二 二
 二二 二〇・二二 二
 二三 二〇・二二 二
 二四 二〇・二二 二
 二五 二〇・二二 二
 二六 二〇・二二 二
 二七 二〇・二二 二
 二八 二〇・二二 二
 二九 二〇・二二 二
 三〇 二〇・二二 二
 三一 二〇・二二 二
 三二 二〇・二二 二
 三三 二〇・二二 二
 三四 二〇・二二 二
 三五 二〇・二二 二
 三六 二〇・二二 二
 三七 二〇・二二 二
 三八 二〇・二二 二
 三九 二〇・二二 二
 四〇 二〇・二二 二
 四一 二〇・二二 二
 四二 二〇・二二 二
 四三 二〇・二二 二
 四四 二〇・二二 二
 四五 二〇・二二 二
 四六 二〇・二二 二
 四七 二〇・二二 二
 四八 二〇・二二 二
 四九 二〇・二二 二
 五〇 二〇・二二 二
 五一 二〇・二二 二
 五二 二〇・二二 二
 五三 二〇・二二 二
 五四 二〇・二二 二
 五五 二〇・二二 二
 五六 二〇・二二 二
 五七 二〇・二二 二
 五八 二〇・二二 二
 五九 二〇・二二 二
 六〇 二〇・二二 二
 六一 二〇・二二 二
 六二 二〇・二二 二
 六三 二〇・二二 二
 六四 二〇・二二 二
 六五 二〇・二二 二
 六六 二〇・二二 二
 六七 二〇・二二 二
 六八 二〇・二二 二
 六九 二〇・二二 二
 七〇 二〇・二二 二
 七一 二〇・二二 二
 七二 二〇・二二 二
 七三 二〇・二二 二
 七四 二〇・二二 二
 七五 二〇・二二 二
 七六 二〇・二二 二
 七七 二〇・二二 二
 七八 二〇・二二 二
 七九 二〇・二二 二
 八〇 二〇・二二 二
 八一 二〇・二二 二
 八二 二〇・二二 二
 八三 二〇・二二 二
 八四 二〇・二二 二
 八五 二〇・二二 二
 八六 二〇・二二 二
 八七 二〇・二二 二
 八八 二〇・二二 二
 八九 二〇・二二 二
 九〇 二〇・二二 二
 九一 二〇・二二 二
 九二 二〇・二二 二
 九三 二〇・二二 二
 九四 二〇・二二 二
 九五 二〇・二二 二
 九六 二〇・二二 二
 九七 二〇・二二 二
 九八 二〇・二二 二
 九九 二〇・二二 二
 一〇〇 二〇・二二 二

撃り 是の如くエホバ此日イスラエルをすくひたまふ而して戦はベテアベンにうつれり
 されど此日イスラエル人苦めり其はサウル民を誓はせて夕まで即ちわが敵に仇をむくゆるまでに食物を食
 ふ者は呪詛れんと言たればなり是故に民の中に食物を味ひし者なし 爰に民みな林森に至りて地の表に蜜あり
 即ち民森にいたりて蜜のながるゝをみる然ども民誓を畏るれば誰も手を口につくる者なし 然にヨナタン
 は其父が民をちかはせしを聞きければ手にある杖の末をのばして蜜にひたし手を口につけたり是に由て其目
 あきらかになりぬ 時に民のひとり答て言けるは汝の父かたく民をちかはせて今日食物をくらふ人は呪詛はれ
 んと言り是に由て民つかれたり ヨナタンいひけるはわが父國を煩せり請ふ我この蜜をすこしく嘗しによりて
 如何にわが目の明かになりしかを見よ ましてや民今日敵よりうばひし物を十分に食しならばペリシテ人を
 ころすこと更におほかるべきにあらずや
 イスラエル人かの日ペリシテ人を撃てミクマシよりアヤロンにいたる而して民はなはだ疲たり 是に
 おいて民劫掠物に走かゝり羊と牛と犢とを取りて之を地のうへにころし血のまゝに之をくらふ 人々サウルに
 つげていひけるは民肉を血のまゝに食ひて罪をエホバにをかすとサウルいひけるは汝ら背けり直ちにわがもとに
 大石をまるばしきたれ サウルまたいひけるは汝らわかれて民のうちにいりていへ人各其牛と各其羊をわ
 がもとに引ききたり此處にてころしくらへ血のまゝにくらひて罪をエホバに犯すなかれと此において民おの
 この夜其牛を手にひききたりて之をかしこにころせり しかしてサウル、エホバに一つの壇をきづく是はサウ
 ルのエホバに壇を築ける始なり

九 然どもサウルと民アガグをゆるしまた羊と牛の最も嘉きもの及び肥たる物並に羔と凡て善き物を残して之を
ほろぼしつくすをこのます但悪き弱き物をほろぼしつくせり

二〇 時にエホバの言サムエルにのぞみていはく 我サウルを王となせしを悔ゆ其は彼背きて我にしたがはず

二一 わが命をおこなはざればなりとサムエル憂て終夜エホバによばはれり かくてサムエル、サウルにあはんとて

夙く起きけるにサムエルにつぐるものありていふサウル、カルメルにいたり勝利の表を立て轉り進みてギルガル

にくだれりと サムエル、サウルの許に至りければサウルこれにいひけるは汝がエホバより福祉を得んことを

ねがふ我エホバの命を行へりと サムエルいひけるは然らばわが耳にいる此羊の聲およびわがきく牛のこゑは

何ぞや サウルいひけるは人々これをアマレク人のところより引ききたれり其は民汝の神エホバにささげん

ために羊と牛の最も嘉きものをのこせばなり其ほかは我らほろぼしつくせり サムエル、サウルにいひけるは

止まれ昨夜エホバの我にかたりたまひしことを汝につげんサウルいひけるはいへ

二七 サムエルいひけるはさきに汝が微き者とみづから憶へる時に爾イスラエルの支派の長となりしに非ずや即

ちエホバ汝に膏を注いでイスラエルの王となせり エホバ汝を途に遣はしていひたまはく往て悪人なるアマレ

ク人をほろぼし其盡るまで戦へよと 何故に汝エホバの言をきかずして敵の所有物にはせかゝりエホバの目の

まへに悪をなせしや サウル、サムエルにいひけるは我誠にエホバの言にしたがひてエホバのつかはしたまふ

途にゆきアマレクの王アガグを執きたりアマレクをほろぼしつくせり たい民其ほろぼしつくすべき物の最初

としてギルガルにて汝の神エホバにささげんとて敵の物の中より羊と牛をとれり サムエルいひけるはエホバ

イ 前二五・三、一五
ロ 前二五・三五、一
六 前二五・三、一五
ハ 前二五・三、一五
ニ 前二五・三、一五
ト 前二五・三、一五
チ 前二五・三、一五
リ 前二五・三、一五
ヌ 前二五・三、一五
ネ 前二五・三、一五
ニ 前二五・三、一五
ノ 前二五・三、一五
ド 前二五・三、一五
ト 前二五・三、一五
チ 前二五・三、一五
リ 前二五・三、一五
ヌ 前二五・三、一五
ネ 前二五・三、一五
ニ 前二五・三、一五
ノ 前二五・三、一五
ド 前二五・三、一五

来一〇・六—九
ワ 前二五・一、一—二、三三
太 前二五・一、一—二、三三
マ 前二五・一、一—二、三三
ル 前二五・一、一—二、三三
ヨ 前二五・一、一—二、三三
コ 前二五・一、一—二、三三
セ 前二五・一、一—二、三三
ソ 前二五・一、一—二、三三
シ 前二五・一、一—二、三三
ス 前二五・一、一—二、三三
セ 前二五・一、一—二、三三
ソ 前二五・一、一—二、三三
シ 前二五・一、一—二、三三
ス 前二五・一、一—二、三三

はその言にしたがふ事を善したまふごとく燔祭と犠牲を善したまふや夫れ順ふ事は犠牲にまさり聽く事は牡羔の

脂にまさるなり 其は違逆は魔術の罪のごとく抗戾は虚しき物につかふる如く偶像につかふるがごとし汝エホ

バの言を棄たるによりエホバもまた汝をすて、王たらざらしめたまふ

二四 サウル、サムエルにいひけるは我エホバの命と汝の言をやぶりて罪ををかしたり是は民をおそれて其言に

したがひたるによりてなり されば今ねがはくはわがつみをゆるし我とともにかへりて我をしてエホバを拜す

二五 することをえさしめよ サムエル、サウルにいひけるは我汝とともにかへらじ汝エホバの言を棄たるによりエホ

バ汝をすて、イスラエルに王たらしめたまはざればなり サムエル去らんとて振還しときサウルその明衣の裾

二六 を捉へしかば裂たり サムエルかれにいひけるは今日エホバ、イスラエルの國を裂て汝よりはなし汝の隣なる

二七 汝より善きものにこれをあたへたまふ またイスラエルの能力たる者は誰らず悔す其はかれは人にあらざれば

二八 くゆることなし サウルいひけるは我罪ををかしたれどねがはくはわが民の長老のまへおよびイスラエルのま

二九 へにて我をたふとみて我とともにかへり我をして汝の神エホバを拜むことをえさしめよ ことにおいてサムエ

三〇 ル、サウルにしたがひてかへるしかしてサウル、エホバを拜む

三二 時にサムエルいひけるは汝らわが許にアマレクの王アガグをひききたれとアガグ喜ばしげにサムエルの許

三三 に来たりアガグいひけるは死の苦みは必ず過ぎりぬ サムエルいひけるは汝の劍はおほくの婦人を子なき者と

三三 なせりかくのごとく汝の母は婦人の中の最も子なき者となるべしとサムエル、ギルガルにてエホバのまへにおい

てアガグを斬り

かくてサムエルはラマにゆきサウルはサウルのギベアにのぼりてその家にいたる 三五サムエル其しぬる日
 までふたゝびきたりてサウルをみざりきしかれどもサムエル、サウルのためになしめりまたエホバはサウルを
 イスラエルの王となせしを悔たまへり 三六

第一章

一 爰にエホバ、サムエルにいひたまひけるは我すでにサウルを棄てイスラエルに王たらしめざるに
 二 汝いつまでかれのために歎くや汝の角に膏油を満してゆけ我汝をベテレヘム人エサイの許につかは
 三 さん其は我其子の中にひとり王を尋ねえたればなり 二サムエルいひけるは我いかで往くことをえんサウル聞
 四 て我をころさんエホバいひたまひけるは汝一犢を携へゆきて言へエホバに犠牲をさしげんために來ると 三しか
 五 してエサイを犠牲の場によべ我汝が爲すべき事をしめさん我汝に告るところの人に膏をそよぐ可し 四サムエル、
 六 エホバの語たまひしごとくなしてベテレヘムにいたる邑の長老おそれて之をむかへいひけるは汝平康なる事のため
 七 きよめて我とともに犠牲の場にきたれと斯てエサイと其諸子を潔めて犠牲の場によびきたる 五
 八 かれらが至れる時サムエル、エリアフを見ておもへらくエホバの膏そよぐものは必ず此人ならんと 六
 九 かるにエホバ、サムエルにいひたまひけるは其容貌と身長を觀るなかれ我すでにかれをすてたりわが視るところ
 一〇 は人に異なり人は外の貌を見エホバは心をみるなり 七エサイ、アビナダブをよびてサムエルのまへを過しむサ
 一一 ムエルいひけるは此人もまたエホバ擇みたまはず 八エサイ、シヤンマを過しむサムエルいひけるは此人もまた

イ母前一一四 本母前一五二二三 一九・二〇 徒一三三 母前九・二六 母前一七・一三 代 二〇・二〇 二二
 オ母前一九二四 母前一五・三三 二二 母前一七・一三 代 二〇・二〇 二二
 ハ母前一五二一、一 母前一六・二二 二〇 母前一七・一三 代 二〇・二〇 二二
 九 母前一五二一、一 母前一六・二二 二〇 母前一七・一三 代 二〇・二〇 二二
 二母前一五二一、一 母前一六・二二 二〇 母前一七・一三 代 二〇・二〇 二二

一〇 エホバえらみたまはず 一〇エサイ其七人の子をしてサムエルの前をすぎしむサムエル、エサイにいふエホバ是等
 二 をえらみたまはず 二サムエル、エサイにいひけるは汝の男子は皆此にをるやエサイいひけるは尙季子のこれり
 三 彼は羊を牧するなりとサムエル、エサイにいひけるは彼を迎へきたらしめよかれが此にいたるまでは我ら食に就
 四 かざるべし 三是において人をつかはしてかれをつれきたらしむ其人色赤く目美しくして其貌麗しエホバいひ
 五 たまひけるは起てこれにあぶらを沃げ是其人なり 四サムエル膏の角をとりて其兄弟の中にてこれに膏をそよげ
 六 り此日よりのちエホバの靈ダビデにのぞむサムエルはたちてラマにゆけり 五
 七 かくてエホバの靈サムエルをはなれエホバより來る惡鬼これを惱せり 六サウルの臣僕これにいひけるは視
 八 よ神より來れる惡鬼汝をなやます 七ねがはくはわれらの主汝のまへにつかふる臣僕に命じて善く琴を鼓く者
 九 一人を求めしめよ神よりきたれる惡鬼汝に臨む時彼手をもて琴を鼓て汝いゆることをえん 八サウル臣僕にいひ
 一〇 けるはわがために巧に鼓琴者をたづねてわがもとにつれきたれ 九時に一人の少者こたへていひけるは我ベテレ
 一一 へム人エサイの子を見しが琴に巧にしてまた豪氣して善くたゝかふ辯舌さはやかなる美しき人なりかつエホバこ
 一二 れとともにいます 一〇サウルすなはち使者をエサイにつかはしていひけるは羊をかふ汝の子ダビデをわがもとに
 一三 遣はせと 一一エサイすなはち驢馬にパンを負せ一囊の酒と山羊の羔を執りてこれを其子ダビデの手によりてサウ
 一四 ルにおくれり 一二ダビデ、サウルの許にいたりて其まへに事ふサウル大にこれを愛し其武器を執る者となす
 一五 サウル人をエサイにつかはしていひけるはねがはくはダビデをしてわが前に事へしめよ彼はわが心にかなへ

三三 神より出たる悪鬼サウルに臨めるときダビデ琴を執り手をもてこれを弾にサウル慰さみて愈え悪鬼かれをはなる

第七章

一 爰にペリシテ人其軍を集めて戦はんとしユダに屬するシヨコにあつまりシヨコとアゼカの間なる
二 バスダミムに陣をとる 三 サウルとイスラエルの人々集まりてエラの谷に陣をとりペリシテ人にむかひて軍の陣列をたつ 四 ペリシテ人は此方の山にたちイスラエルは彼方の山にたつ谷は其あひだにあり 五 時にペリシテ人の陣よりガテのゴリアテと名くる挑戦者いできたる其身の長六キユビト半 六 首に銅の盔を戴き身に鱗綴の鎧甲を着たり其よるひの銅のおもさは五千シケルなり 七 また脛には銅の脛當を着け肩の間に銅の矛戟を負ふ 八 其槍の柄は機梁のごとく槍の鋒刃の鐵は六百シケルなり 九 楯を執る者其前にゆく 十 ゴリアテ立てイスラエルの諸行伍によばはり云けるは汝らはなんぞ陣列をなして出きたるや我はペリシテ人にして汝らはサウルの臣下にあらずや汝ら一人をえらみて我とくたせ 十一 其人もし我とたゝかひて我をころすことをえば我ら汝らの臣僕とならんされど若し我かちてこれを殺さば汝ら我らの僕となりて我らに事ふ可し 十二 かくて此ペリシテ人いひけるは我今日イスラエルの諸行伍を挑む一人をいだして我と戦はしめよと 十三 サウルおよびイスラエルみなペリシテ人のこの言を聞き驚きて大に懼れたり

一四 抑ダビデはかのベレレムユダのエフラタ人エサイとなづくる者の子なり此人八人の子ありしがサウルの世には年邁みてすでに老たり 一五 エサイの長子三人ゆきてサウルにしたがひて戦争にいづ其戦にいでし三人の子の名は長をエリアブといひ次をアビナダブといひ第三をシャンマといふ 一六 ダビデは季子にして其兄三人はサウルにしたがへり 一七 ダビデはサウルに往來してベレレムにて其父の羊を牧ふ 一八 彼ペリシテ人四十日のあひだ朝夕近づきて前にたてり

一七 時にエサイ其子ダビデにいひけるは今汝の兄のために此烘麥一斗と此十のパンを取りて陣營にをる兄のところにいそぎゆけ 一八 また此十の乾酪をとりて其千夫の長におくり兄の安否を視て其返事をもちきたれと 一九 サウルと彼等およびイスラエル人は皆ペリシテ人となゝかひてエラの谷にありき 二〇 ダビデ朝夙くおきて羊をひとり牧者にあづけエサイの命ぜしごとく携へゆきて車營にいたるに軍勢いでて行伍をなし鯨波をあげたり 二一 しかしてイスラエルとペリシテ人陣列をたてて行伍を行伍に相むかはせたり 二二 ダビデ其荷をおろして荷をまもる者の手にわたし行伍の中にはせゆきて兄の安否を問ふ 二三 ダビデ彼等と俱に語れる時視よペリシテ人の行伍よりガテのペリシテ人のゴリアテとなづくる彼の挑戦者のほりきたり前のことばのごとく言しかばダビデ之を聞けり 二四 イスラエルの人其人を見て皆逃て之をはなれ痛く懼れたり 二五 イスラエルの人いひけるは汝らこののほり来る人を見しや誠にイスラエルを挑んとて上りきたるなり彼をころす人は王大なる富を以てこれをとまし其女子をこれにあたへて其父の家にはイスラエルの中にて租税をまぬかれしめん 二六 ダビデ其傍にたてる人々にかたりていひけるは此ペリシテ人をころしイスラエルの耻辱を雪ぐ人には如何なることをなすや此割禮なきペリシテ人は誰なればか活る神の軍を擲む 二七 民まへのごとく答へていひけるはかれを殺す人には斯のごとくせらるべしと

二八 兄エリアブ、ダビデが人々とかたるを聞しかばエリアブ、ダビデにむかひて怒りを發しいひけるは汝なにサムエル前書 一七・一五——一八

なるやアブネルいひけるは王汝の靈魂は生くわれしらざるなり 王いひけるはこの少年はたれの子なるかを尋ねよ
 ダビデかのペリシテ人を殺してかへれる時アブネルこれをひきて其ペリシテ人の首級を手にもてるまゝ
 サウルのまへにつれゆきければ サウルかれにいひけるは若き人よ汝はたれの子なるやダビデこたへけるは
 汝の僕ベテレヘム人エサイの子なり

第一八章

ダビデ、サウルにかたることを終しときヨナタンの心ダビデの心にむすびつきてヨナタンおのれの命のごとくダビデを愛せり
 此日サウル、ダビデをかへて父の家にかへらしめず
 ヨナタンおのれの命のごとくダビデを愛せしかばヨナタンとダビデ契約をむすべり
 ヨナタンおのれの衣たる明衣を脱ぎてダビデにあたふ其戎衣および其刀も弓も帯もまたしかせり
 ダビデは凡てサウルが遣はすところにいひてゆきて功をあらはしければサウルかれを兵隊の長となせりしかしてダビデ民の心にかなひ又サウルの僕の心にもかなふ

衆人かへりきたれる時すなはちダビデ、ペリシテ人をころして還れる時婦女イスラエルの邑々よりいできたり
 譏と祝歌と磬をもちて歌ひまひつゝサウル王を迎ふ
 婦人踊躍つゝ相こたへて歌ひけるはサウルは千をうち殺しダビデは萬をうちころすと
 サウル甚だ怒りこの言をよるこばずしていひけるは萬をダビデに歸し千をわれに歸す此上かれにあたふべき者は唯國のみと
 サウルこの日より後ダビデを目がけたり
 次の日神より出たる惡鬼サウルにのぞみてサウル家のなかにて預言したりしかばダビデ故のごとく手をもつて琴をひけり時にサウルの手に投槍ありければ
 サウル我ダビデを壁に刺とほさんといひて其投槍をさし

イ母前一七・五五 二申一三・六 母前 母後一七・二五 士 母前二二・一一、二 母前二五・二八 上一八・二九 徒 母前一九・一〇、二
 母前一七・一一 一九二七、二〇一 母前 母後一八・二四、一 九・五 母前二二・二二、二 母前一六・二四 一六・一六 徒 母前一九・一〇、二
 母前一七・一一 七 母前一二・二六 五三〇 母前一五・二四 又 母前一四 母前一六・二四 王 母前一九・九
 母前一六・一四、二 九 母前一八・一六 民 二九 母前三五・二 二二 母後七・一八 母前一八・一七 一
 母前一六・二二、一 二七、一七 母後五 八 母前一八・二二、二 母後二二・一八 母前一八・二六 一
 母前一八・二五、二 母前一八・五 母前一七・二五 五 母後二二・九 母前一八・二八 母前一八・二九 一
 母前一八・二七、九 母前一八・三三、九 母前一八・二八 母前一八・二六 一

あげしがダビデ二度身をかはしてサウルをさけたり
 エホバ、サウルをはなれてダビデと共にいますによりて
 サウル彼をおそれたり
 是故にサウル彼を遠ざけて千夫長となせり
 ダビデすなはち民のまへに出入す
 また
 ダビデすべて其ゆくとともに功をあらはし且エホバかれとともにいませり
 サウル、ダビデが大に功をあらはすをみてこれを恐れたり
 しかれどもイスラエルとユダの人はみなダビデを愛せり
 彼が其前に出入するに
 よりてなり

サウル、ダビデにいひけるはわれわが長女メラブを汝に妻さん
 汝たゞわがために勇みエホバの軍に戦ふべしと其はサウルわが手にてかれを殺さでペリシテ人の手にてころさんとおもひたればなり
 ダビデ、サウルにいひけるは我は誰ぞわが命はなんぞわが父の家はイスラエルにおいて何なる者ぞや我いかでか王の婿となるべけん
 然るにサウルの女子メラブはダビデに嫁ぐべき時におよびてメホラ人アデリエルに妻されたり
 サウルの女ミカル、ダビデを愛す人これを王に告げればサウル其事を善しとせり
 サウルいひけるは我ミカルをかれにあたへて彼を謀る手段となし
 ペリシテ人の手にてかれを殺さんといひてサウル、ダビデにいひけるは汝今日ふたゝびわが婿となるべし

かくてサウル其僕に命じけるは汝ら密にダビデにかたりて言へ
 視よ王汝を悦び王の僕みな汝を愛すされば
 汝王の婿となるべしと
 サウルの僕此言をダビデの耳に語りしかばダビデいひけるは王の婿となること汝らの目には易き事とみゆるや且われは貧しく賤しき者なりと
 サウルの僕サウルにつけてダビデ是の如くかたれ

三二 童子に視よ矢は汝の此旁にあり其を取と曰ばなんぢきたるべしエホバは生く汝安くして何もなかるべければなり
 三三 されど若し我少年に視よ矢は汝の彼旁にありといはゞ汝さるべしエホバ汝をさらしめたまふなり 汝と我
 とかたれることについては願はくはエホバ恒に汝と我との間にいませと

三四 ダビデ即ち野にかくれぬ楮月朔になりければ王坐して食に就く 即ち王は常のごとく壁によりて座を占
 三六 むヨナタン立あがりアブネル、サウルの側に坐すダビデの座はなむし されど其日にはサウル何をも曰ざりき其
 三七 は何事か彼におこりしならん彼きよからず定て潔からずと思ひたればなり 明日すなはち月の二日におよびて
 三八 ダビデの座なほ虚しサウル其子ヨナタンにいひけるは何ゆゑにエサイの子は昨日も今日も食に來らざるや
 三九 ナタン、サウルにこたへけるはダビデ切にベレレムにゆかんことを我にこひて曰けるは ねがはくは我を
 四〇 ゆるしてゆかしめよわが家邑にて祭をなすによりわが兄我にきたることを命ぜり故に我もし汝のまへにめぐみを
 四一 えたるならばねがはくは我をゆるして去しめ兄弟をみることを得さしめよと是故にかれは王の席に來らざるなり
 四二 サウル、ヨナタンにむかひて怒りを發しかれにいひけるは汝は曲り且悖れる婦の子なり我あに汝がエサイ
 四三 の子を簡みて汝の身をはづかしめまた汝の母の膚を辱しむることを知ざらんや エサイの子の此世にながらふ
 四四 るあひだは汝と汝の位固くたつを得ず是故に今人をつかはして彼をわが許に引きたれ彼は死ぬべき者なり
 四五 ナタン父サウルに對ていひけるは彼なによりて殺さるべきか何をなしたるやと こゝにおいてサウル、ヨ
 四六 ナタンを撃んとて投槍をさしあげたりヨナタンすなはち其父のダビデを殺さんと決しをしれり かくてヨナタ
 四七 ン烈しく怒りて席を立ち月の二日には食をなさざりき其は其父のダビデをばづかしめしによりてダビデのために

イ 高四二一 ハ 利七二二一 五・五 二二三路三三三
 ロ 母前二〇・一 母前二〇・六 母前二〇・七 母前二〇・七 母前二〇・七
 又 母前二四・三 可二 出九一五 聖七 二四・五 太二・四 太二・二二 四
 五 母前二〇・一 母前一九・五 太二七 母前二〇・七 母前二〇・七 母前二〇・七 母前二〇・七
 又 母前二四・三 可二 出九一五 聖七 二四・五 太二・四 太二・二二 四
 五 母前二〇・一 母前一九・五 太二七 母前二〇・七 母前二〇・七 母前二〇・七 母前二〇・七
 又 母前二四・三 可二 出九一五 聖七 二四・五 太二・四 太二・二二 四
 五 母前二〇・一 母前一九・五 太二七 母前二〇・七 母前二〇・七 母前二〇・七 母前二〇・七

憂へたればなり

三六 登朝ヨナタン一小童子を従がへダビデと約せし時刻に野にいゆき 童にいひけるは走りて我はなつ矢
 三七 をたづねよと童子はしる時ヨナタン矢を彼のさきに發てり 童子がヨナタンの發ちたる矢のところをいたれる
 三八 時ヨナタン童子のうしろに呼はりていふ矢は汝のさきにあるにあらずや ヨナタンまた童子のうしろによばは
 三九 りていひけるは速かにせよ急げ止まるなかれとヨナタンの童子矢をひろひあつめて其主人のもとにかへる
 四〇 れど童子は何をも知ざりき只ヨナタンとダビデ其事をしりたるのみ かくてヨナタン其武器を童子に授ていひ
 四一 けるは往けこれを邑に携へよと 童子すなはち往けり時にダビデ石の傍より立ちあがり地にふして三たび拜せ
 四二 りしかしてふたり互に接吻してたがひに哭くダビデ殊にはなはだし ヨナタン、ダビデにいひけるは安じて
 四三 往け我ら二人ともにエホバの名に誓ひて願くはエホバ恒に我と汝のあひだに坐し我が子孫と汝の子孫のあひだに
 四四 いませといへりとダビデすなはちたちて去るヨナタン邑にいりぬ

第二章

一 ダビデ、ノブにゆきて祭司アヒメレクにいたるアヒメレク懼れてダビデを迎へこれにいひけるは
 二 汝なんぞ獨にして誰も汝ともならざるや ダビデ祭司アヒメレクにいふ王我に一の事を命じて
 三 我にいふ我が汝を遣はすところの事およびわが汝に命じたる所については何をも人にしらすなかれと我 某處
 四 に我少者を出おけり いま何か汝の手にあるや我手に五のパンか或はなににてもある所を與よ 祭司ダビデ
 五 に對ていひけるは常のパンはわが手になしされど若し少者婦女をだに慎みてありしならば聖きパンあるなりと
 六 ダビデ祭司に對ていひけるは實にわがいでしより此三日は婦女われらにちかづかず且少者等の器は潔し又パ
 ンは常の物のごとし今日器に潔きパンあれば殊に然と 祭司かれに聖きパンを與たり其はかしこに供前のパン

の外はバン无りければなり即ち其バンは下る日に熱きパンをさげんとて之をエホバのまへより取されるなり
 其日かしこにサウルの僕一人留められてエホバのまへにあり其名をドエグといふエドミ人にしてサウルの
 牧者の長なり **八** ダビデまたアヒメレクにいふ此に汝の手に槍か劍あらぬか王の事急なるによりて我は刀も武器
 も携へざりしと **九** 祭司いひけるは汝がエラの谷にて殺したるベリシテ人ゴリアテの劍布に裹みてエボデの後に
 あり汝もし之をとらんとおもはゞ取れ此にはほかの劍なしダビデいひけるはそれにまさるものなし我にあたへ
 よと

二〇 ダビデ其日サウルをおそれて立てガテの王アキシのところ逃げゆきぬ **二一** アキシの臣僕アキシに曰ける
 は此は其地の王ダビデにあらずや人々舞蹈のうちこの人のことを歌ひあひてサウルは千をうちころしダビデは
 萬をうちころすといひしにあらずや **二二** ダビデこの言を心に藏め深くガテの王アキシをおそれ **二三** 人々のまへに
 て伴て其氣を變じ執はれて狂人のさまをなし門の扉に畫き其涎沫を鬚にながれくらしむ **二四** アキシ僕に云ける
 は汝らの見ることく此人は狂人なり何ぞかれを我にひき來るや **二五** 我なんぞ狂人を須ひんや汝ら此者を引きたり
 てわがまへに狂しめんとするや此者なんぞ吾が家にいるべけんや

第二章

一 是故にダビデ其處をいでたちてアドラムの洞穴にのがる其兄弟および父の家みな聞きおよびて
 彼處にくだり彼の許に至る **二** また惱める人負債者心に嫌ぬ者皆かれの許にあつまりて彼其
 長となれりかれとともにある者はおよそ四百人なり

三 ダビデ其處よりモアブのミヅバにいたりモアブの王にいひけるは神の我をいかにしたまふかを知るまで

イ利二四・八九
 上二一・九
 二九・二五
 ハ律前一七二・五〇
 二律前一八・七、二九
 三律前二二・一三
 四律前二二・一三
 五律前二二・一三
 六律前二二・一三
 七律前二二・一三
 八律前二二・一三
 九律前二二・一三
 一〇律前二二・一三
 一一律前二二・一三
 一二律前二二・一三
 一三律前二二・一三
 一四律前二二・一三
 一五律前二二・一三
 一六律前二二・一三
 一七律前二二・一三
 一八律前二二・一三
 一九律前二二・一三
 二〇律前二二・一三
 二一律前二二・一三
 二二律前二二・一三
 二三律前二二・一三
 二四律前二二・一三
 二五律前二二・一三
 二六律前二二・一三
 二七律前二二・一三
 二八律前二二・一三
 二九律前二二・一三
 三〇律前二二・一三
 三一律前二二・一三
 三二律前二二・一三
 三三律前二二・一三
 三四律前二二・一三
 三五律前二二・一三
 三六律前二二・一三
 三七律前二二・一三
 三八律前二二・一三
 三九律前二二・一三
 四〇律前二二・一三
 四一律前二二・一三
 四二律前二二・一三
 四三律前二二・一三
 四四律前二二・一三
 四五律前二二・一三
 四六律前二二・一三
 四七律前二二・一三
 四八律前二二・一三
 四九律前二二・一三
 五〇律前二二・一三

ねがはくはわが父母をして出て汝らとともにをらしめよと **四** 遂にかれらをモアブの王のまへにつれきたるかれ
 らはダビデが要害にをる間王とともにありき **五** 預言者ガデ、ダビデに云けるは要害に住るなかれゆきてユダの
 地にいたれとダビデゆきてハレテの叢林にいたる **六** 爰にサウル、ダビデおよびかれともなる人々の見露されしを聞き時サウルはギベアにあり手に槍を
 執て岡槽の柳の樹の下にをり臣僕ども皆其傍にたてり **七** サウル側にたてる僕にいひけるは汝らベニヤミン人
 聞けよエサイの子汝らおのおのに田と葡萄園をあたへ汝らおのおのを千夫長百夫長となすことあらんや
八 汝ら皆我に敵して謀り一人もわが子のエサイの子と契約を結びしを我につげしらす者なしまた汝ら一人も
 わがために憂へずわが子が今日のごとくわが僕をばげまして道に伏て我をおそはしめんとするを我につげしらす
 者なし **九** 時にエドミ人ドエグ、サウルの僕の中にたち居りしが答へていひけるは我エサイの子のノブにゆきて
一〇 アヒトプの子アヒメレクに至るを見しが **一一** アヒメレクかれのためにエホバに問ひまたかれに食物をあたへべり
一二 シテ人ゴリアテの劍をあたへたりと **一三** 王すなはち人をつかはしてアヒトプの子祭司アヒメレクおよびその父の家すなはちノブの祭司たる人々を
一四 召したればみな王の許にきたる **一五** サウルいひけるは汝アヒトプの子聴よ答へけるは主よ我こゝにあり **一六** サウ
 ルかれにいふ汝なんぞエサイの子とともに我に敵して謀り汝かれにバンと劍をあたへ彼が爲に神に問ひかれをし
一七 て今日のごとく道に伏て我をおそはしめんとするや **一八** アヒメレク王にこたへていひけるは汝の臣僕のうち誰か
一九 ダビデのごとく忠義なる彼は王の婿にして親しく汝に見ゆるもの汝の家に尊まるゝ者にあらずや **二〇** 我其時かれ

二六 ダビデこれらの言をサウルに語りをへしときサウルいひけるはわが子ダビデよ是は汝の聲なるかとサウル
 二七 聲をあげて哭きぬ 一七 しかししてダビデにいひけるは汝は我よりも正し我は汝に惡をむくゆるに汝は我に善をむく
 二八 ゆ 汝今日いかに汝が我に善くなすかを明かにせりエホバ我を爾の手にわたしたまひしに爾我をころさざりし
 二九 なり 人もし其敵にあはゞこれを安らかに去しむべけんや爾が今日我になしたる事のためにエホバ爾に善を
 三〇 むくいたまふべし 二〇 視よ我爾が必ず王とならんことを知りまたイスラエルの王國の爾の手によりにて堅くたゞん
 三一 ことをしる 二一 今爾エホバをさして我にわが後にてわが子孫を斷すわが名をわが父の家滅せざらんことを誓へ
 三二 と 三三 ダビデすなはちサウルにちかふ是においてサウルは家にかへりダビデと其從者は要害にのぼれり

第二十五章

一 爰にサムエル死にしかばイスラエル人皆あつまりて之をかなしみラマにあるその家にてこれを葬
 二 むれりダビデたちてバランの野にくだる

二 マオンに一箇の人あり其所有はカルメルにあり其人甚だ大なる者にして三千の羊と一千の山羊をもちしが
 三 カルメルにて羊の毛を剪り居たり 其人の名はナバルといひ其妻の名はアビガルといふアビガルは賢く顔美き
 四 婦なりされど其夫は剛愎にして其爲すところ惡かりきかれはカレブの人なり 四 ダビデ野にありてナバルが其羊
 五 の毛を剪りをるを聞き 五 ダビデ十人の少者を遣はすダビデ其少者にいひけるはカルメルにのぼりナバルにいた
 六 りわが名をもてかれに安否をとひ 六 かくのごとくいへ願くは壽ながかれ爾平安なれ爾の家やすらかなれ爾が有
 七 ところの物みなやすらかなれ 七 我爾が羊毛を剪せをるを聞き爾の牧羊者は我らとともにありしが我らこれを
 八 害せざりきまたかれらがカルメルにありしあひだかれらの物何も失たることなし 八 爾の少者に問へかれら爾に

イ 二五・一六—二五・二七
 二五・一六—二五・二七
 二五・二八—二五・三〇
 二五・三一—二五・三二
 二五・三三—二五・三四
 二五・三五—二五・三六
 二五・三七—二五・三八
 二五・三九—二五・四〇
 二五・四一—二五・四二
 二五・四三—二五・四四
 二五・四五—二五・四六
 二五・四七—二五・四八
 二五・四九—二五・五〇
 二五・五一—二五・五二
 二五・五三—二五・五四
 二五・五五—二五・五六
 二五・五七—二五・五八
 二五・五九—二五・六〇
 二五・六一—二五・六二
 二五・六三—二五・六四
 二五・六五—二五・六六
 二五・六七—二五・六八
 二五・六九—二五・七〇
 二五・七一—二五・七二
 二五・七三—二五・七四
 二五・七五—二五・七六
 二五・七七—二五・七八
 二五・七九—二五・八〇
 二五・八一—二五・八二
 二五・八三—二五・八四
 二五・八五—二五・八六
 二五・八七—二五・八八
 二五・八九—二五・九〇
 二五・九一—二五・九二
 二五・九三—二五・九四
 二五・九五—二五・九六
 二五・九七—二五・九八
 二五・九九—二五・一〇〇

つげん願くは少者をして爾のまへに恩をえせしめよ我ら吉日に來る請ふ爾の手にあるところの物を爾の僕らおよ
 び爾の子ダビデにあたへよ

九 ダビデの少者いたりダビデの名をもつて是らのことばの如くナバルに語りてやめり 一〇 ナバル、ダビデの
 一〇 僕にこたへていひけるはダビデは誰なるエサイの子は誰なる此頃は主人をすて遁逃る僕おほし 二 我あに
 一 わがパンと水およびわが羊毛をきる者のために殺したる肉をとりて何處よりか知れざるところの人々にあたふべ
 二 けんや 二二 ダビデの少者ふりかへりて其道に就き歸りきたりて此等の言のごとくダビデに告ぐ 三 是においてダ
 三 ビデ其從者に爾らのおの劍を帶よと言ければ 各劍をおぶダビデもまた劍をおぶ而して四百人ばかりダビデに
 四 したがひて上り二百人は輜重のところに止れり

一四 時にひとり少者ナバルの妻アビガルに告ていひけるは視よダビデ野より使者をおくりて我らの主人を
 一五 祝したるに主人かれらを罵れり 一五 されどかの人々はわれらに甚だ善くなし我らは害をかうむらず亦われら野に
 一六 ありし時かれらとともにをるあひだはなにをも失なはざりき 一六 我らが羊をかひて彼らとともにありしあひだ
 一七 彼らは日夜われらの牆となれり 一七 されば爾今しりてなにをなさんかを考ふべし其はわれらの主人および主人の
 一八 全家に定めて害きたるべければなり主人は邪魔なる者にして語ることをえずと
 一九 アビガルいそぎパン二百 酒の革囊二 既に調へたる羊五 烘麥五セア 乾葡萄百球 乾無花果の團塊二百
 二〇 を取て驢馬にのせ 一九 其少者にいひけるは我先に進め視よ我爾らの後にゆくと然ど其夫ナバルには告げざりき
 二〇 アビガル驢馬にのりて山の僻處にくだれる時視よダビデと其從者かれにむかひてくだりければかれ其人々に

三 我かさねて爾に害を加へざるべし嗚呼われ愚なることをなして甚だしく過てり 三三
 三 王上槍を視よ請ふひとりの少者をしてわたりてこれを取しめよ 三三 ねがはくはエホバのおのに其義と眞實とにしたがひて報いたまへ其はエホバ今日爾をわが手にわたしたまひしに我エホバの受膏者に敵してわが手をのぶることをせざればなり 二四 爾の生命を今日わがおもんぜしごとくねがはくはエホバわが生命をおもんじて諸の艱難のうちより我をすくひいだしたまへ 二五 サウル、ダビデにいひけるはわが子ダビデよ爾はほむべきかな爾大なる事を爲さん亦かならず勝をえんとしてかしてダビデは其道にさりサウルはおのれの所にかへれり

第二十七章

一 一 ダビデ心の中にいひけるは是のごとくば我早晚サウルの手にほろびん速にベリシテ人の地にのがるゝにまさることあらず然らばサウルかさねて我をイスラエルの四方の境にたづぬることをやめて
 二 我かれの手をのがれんと 二 ダビデたちておのれともなる六百人のものともわたりてガテの王マオクの子アキシにいたる 三 ダビデと其従者ガテにてアキシとともに住ておのおの其家族とともにをるダビデはその二人の妻すなはちエズレル人アヒノアムとカルメル人ナバルの妻なりしアビガルとともにあり 四 ダビデのガテににげしことサウルにきこえければサウルかさねてかれをたづねざりき
 五 こゝにダビデ、アキシにいひけるは我もし爾のまへに恩を得たるならばねがはくは郷里にある邑のうちにて一のところを我にあたへて其處にすむことを得さしめよ僕なんぞ爾とともに王城にすむべけんやと 六 アキシ其日チクラグをかれにあたへたり是故にチクラグは今日にいたるまでユダの王に屬す 七 ダビデのベリシテ人の國にをりし日數は一年と四箇月なりき

イ 二六・二二—二七・七
 二六・二二—二七・七
 二六・二二—二七・七

八 ダビデ其従者と共にのぼりゲシユル人ゲゼリ人アマレク人を襲ふたり昔より是等はシユルにいたる地にすみてエジプトの地にまでおよべり 九 ダビデ其地をうちて男をも女をも生し存さず羊と牛と駱駝と衣服をとりて還りてアキシに至る 一〇 アキシいひけるは爾ら今日何地を襲ひしやダビデいひけるはユダの南とエラメルエラメルの南と二 ケニ人の南をかせりと 二 ダビデ男も女も生存らしめずして一人をもガテにひきゆかさりき其はダビデ恐くは彼らダビデかくなせりといひて我儕の事を告んといひたればなりダビデ、ベリシテ人の地にすめるあひだは其なすところ常にかくのごとなりき 二二 アキシ、ダビデを信じていひけるは彼は其民イスラエルをして全くおのれを惡ましむされば永くわが僕となるべし

第二十八章

一 一 其頃ベリシテ人イスラエルと戦はんとて軍のために軍勢を集められたればアキシ、ダビデにいひけるは爾明かにこれをしれ爾と爾の従者我とともに出て軍にくはるべし 二 ダビデ、アキシにいひけるはされば爾僕のなさんとををしるべしとアキシ、ダビデにさらば我爾を永く我身をまもる者となさんといへり 三 サムエルすでに死たればイスラエルみなこれをかなしみてこれをそのまちらマにはうむれりまたサウルは口寄者とト筮師を其地よりおひいだせり 四 ベリシテ人あつまりきたりてシユネムに陣をとりければサウル、イスラエルを悉くあつめてギルボアに陣をとれり 五 サウル、ベリシテ人の軍を見しときおそれて其心大にふるへたり 六 サウル、エホバに問ひけるにエホバ對たまはず夢に因てもウリムによりても預言者によりてもこたへたまはず 七 サウル僕等にいひけるは口寄の婦を求めよわれそのところにゆきてこれに尋ねんと僕等かれにいひ

けるは視よエンドルに口寄の婦あり
 ハ サウル形を變へて他の衣服を著二人の人をともなひてゆき彼等夜の間其婦の所にいたるサウルいひける
 九 は請ふわがために口寄の術をおこなひてわが爾に言ふ人をわれに呼おこせ 婦かれにいひけるはなんぢサウルのなしたる事すなはち如何にかれが口寄者とト箆師を國より斷さりたるを知る爾なんぞ我を死しめんとてわが生命を亡す謀計をなすや
 一〇 サウル、エホバを指てかれに誓ひいひけるはエホバは生く此事のためになんぢ罪にあふことあらじ 婦いひけるは誰を我なんぢに呼起すべきかサウルいふサムエルをよびおこせ 婦サムエルを見て大なる聲にてさけびいだせりしかして婦サウルにいひけるは爾なにゆゑに我を欺きしや爾はすなはちサウルなり 王かれにいひけるは恐るゝなかれ爾なにを見しや婦サウルにいひけるは我神の地よりのぼるを見たり
 一四 サウルかれにいひけるは其形容は如何彼いひけるは一人の老翁のぼる其人明衣を衣たりサウル其人のサムエルなるをしりて地にふして拜せり

一五 サムエル、サウルにいひけるは爾なんぞ我をよびおこして我をわづらはすやサウルこたへけるは我いたく悩むペリシテ人我にむかひて軍をおこし又神我をはなれて預言者によりても又夢によりてもふたゝび我にこたへたまはずこのゆゑに我なすべき事を爾にまなばんとて爾を呼り サムエルいひけるはエホバ爾をはなれて爾の敵となりたまふに爾なんぞ我にとふや エホバわれをもて語りたまひしことをみづから行ひてエホバ國を爾の手より割きはなち爾の隣人ダビデにあたへたまふ 爾エホバの言にしたがはず其烈しき怒をアマレクにもらさざりしによりてエホバ此事を今日爾になしたまふ エホバ、イスラエルをも爾とともにペリシテ人の手にわた

イ申一八一—代上
 一〇・二三 八八
 一四 九・五 伯一三
 一四 九・五 伯一三
 一四 九・五 伯一三

したまふべし明日爾と爾の子等我ともなるべしまたイスラエルの陣營をもエホバ、ペリシテ人の手にわたしたまはんと

一〇 サウル直ちに地に伸びたふれサムエルの言のために痛くおそれ又其力を失へり其はかれ其一日一夜物食ざりければなり かの婦サウルにいたり其痛く慄くを見てこれにいひけるは視よ仕女爾の言をきゝわが生命をかけて爾が我にいひし言にしたがへり されば請ふ爾も仕女の言を聽て我をして一口のパンを爾のまへにそなへしめよしかして爾くらひて途に就く時に力を得よ されどサウル否みて我は食はじといひしを其僕および婦強ければ其言をきゝいれて地より立あがり床のうへに坐せり 婦の家に肥たる積ありしかば急ぎて之を殺しまた粉をとり搏て酔いれぬパンを炊き サウルのまへと其僕等のまへに持ちきたりければ彼等くらひて立ちあがり其夜のうちにされり

第二十九章

一 爰にペリシテ人其軍をことごとくアベクにあつむイスラエルはエズレルにある泉水の傍に陣を其後にすゝむ 二 ペリシテ人の君等あるひは百人或は千人をひきぬて進みダビデと其従者はアキシとともに
 三 は此はイスラエルの王サウルの僕ダビデにあらずやかれ此日ごろ此年ごろ我とともにをりしがその逃げおちし日より今日にいたるまで我かれの身に咎あるを見ずと 四 ペリシテ人の諸伯これを怒る即ちペリシテ人の諸伯彼にいひけるは此人をかへらしめて爾が之をおきし其所にふたゝびいたらしめよ彼は我らとともに戦ひにくだるべからず然ば彼戦争においてわれらの敵とならざるべしかれ其主と和がんとせば何をもてすべきやこの人々の首級を

もてすべきにあらすや 是はかつて人々が舞蹈の中にて歌ひあひサウルは千をうちころしダビデは萬をうちころすといひたるダビデにあらすや

六 アキシ、ダビデをよびてこれにいひけるはエホバは生くまことになんちは正し爾の我とともに陣營に入するはわが目には善と見ゆ其は爾が我に來りし日より今日にいたるまで我爾の身に悪き事あるを見ざればなり然ど諸伯の目には爾よからす されば今かへりて安かにゆきペリシテ人の諸伯の目に悪く見ゆることをなすなかれ 七 ダビデ、アキシにいひけるは我何をなせしやわが爾のまへに出し日より今日までに爾何を僕の身に見たればか我ゆきてわが主なるわうの敵とたゝかふことをえざると アキシこたへてダビデにいひけるは我爾のわが目には神の使のごとく善きをしるされどペリシテ人の諸伯かれは我らとともに戦ひにのぼるべからずといへり 八 されば爾および爾の主の僕の爾とともにきたれる者明朝夙に起よ爾ら朝はやくおきて夜のあくるに及ばざるべし 是をもてダビデと其従者ペリシテ人の地にかへらんと朝はやく起てされりしかしてペリシテ人はエズレルにのぼれり

第三章

一 ダビデと其従者第三日にチクラグにいたるにアマレク人すでに南の地とチクラグを侵したりかれらチクラグを撃ち火をもて之を燬き 其中に居りし婦女を擄にし老たるをも若きをも一人も殺さずして之をひきて其途におもむけり 三 ダビデと其従者邑にいたりて視に邑は火に燬けその妻と男子女子は擄にせられたり 四 ダビデおよびこれとともにある民聲をあげて哭き終に哭く力もなきにいたれり 五 ダビデのふたりの妻すなはちエズレル人アヒノアムとカルメル人ナバルの妻なりしアビガルも虜にせられたり 六 時にダビデ

大に心を苦めたり其は民のおの其男子女子のために氣をいらだてダビデを石にて撃んといひたればなりされど

ダビデ其神エホバによりておのれをばげませり

七 ダビデ、アヒメレクの子祭司アビヤタルにいひけるは請ふエホデを我にもちきたれとアビヤタル、エホデをダビデにもちきたる 八 ダビデ、エホバに問ていひけるは我此軍の後を追ふべきや我これに追つくことをえんかとエホバかれにこたへたまはく追ふべし爾かならず追つきてたしかに取もどすことをえん 九 ダビデおよびこれとともになる六百人の者ゆきてベソル川にいたれり後にのこれる者はこゝにとゞまる 一〇 即ちダビデ四百人をひきゐて追ゆきしが憊れてベソル川をわたることあたはざる者二百人はとゞまれり 一一 衆人野にて一人のエジプト人を見これをダビデにひききたりてこれに食物をあたへければ食へりまたこれに水をのませたり 一二 すなはち一段の乾無花果と二球の乾葡萄をこれにあたへたり彼くらひて其氣ふたゞび爽かなれりかれは三日三夜物をもくはず水をものまざりしなり 一三 ダビデかれにいひけるは爾は誰の人なる爾はいつくの者なるやかれいひけるは我はエジプトの少者にて一人のアマレク人の僕なり三日まへに我疾にかゝりしゆゑにわが主人我をすてたり 一四 我らケレテ人の南とユダの地とカレブの南ををかしまた火をもてチクラグをやけり 一五 ダビデかれにいひけるは爾我を此軍にみちびきくだるやかれいひけるは爾我をころさずまた我をわが主人の手にわたさざるを神をさして我に誓へ我爾を此軍にみちびきくだらん 一六 かれダビデをみちびきくだりしが視よ彼等はペリシテ人の地とユダの地より奪ひたる諸の大なる掠取物のためによろこびて飲食し踊りつゝ地にあまねく散ひろがりて居る 一七 ダビデ暮あひより次日の晩にいたるまで

第八章

一 此後ダビデ、ペリシテ人を撃つてこれを服すダビデまたペリシテ人の手よりメテグアンマをとれり
二 ダビデまたモアブを撃ち彼らをして地に伏しめ繩をもてかれらを度れり即ち二條の繩をもて
三 死す者を度り一條の繩をもて生しおく者を量るモアブ人は貢物を納てダビデの臣僕となれり

四 ダビデまたレホブの子なるゾバの王ハダゼルがユフラテ河の邊にて其勢を新にせんとて往るを撃り
五 しかしてダビデ彼より騎兵千七百人歩兵二萬人を取りまたダビデ一百の車の馬を存して其餘の車馬は皆其筋を
六 切斷り
七 ダマスコのスリア人ゾバの王ハダゼルを援んとて來りければダビデ、スリア人二萬二千を殺せり

八 しかしてダビデ、ダマスコのスリアに代官を置きぬスリア人は貢物を納てダビデの臣僕となれりエホバ、ダビ
九 デを凡て其往く所にて助けたまへり
十 ダビデ、ハダゼルの臣僕等の持る金の楯を奪ひてこれをエルサレムに
携きたる

一〇 九 時にハマテの王トイ、ダビデがハダゼルの總の軍を撃破りしを聞て
トイ其子ヨラムをダビデ王につ
かはし安否を問ひかつ祝を宣しむ其はハダゼル嘗てトイと戦を爲したるにダビデ、ハダゼルとたゝかひて
これを撃やぶりたればなりヨラム銀の器と金の器と銅の器を携へ來りければ
ダビデ王其攻め伏せたる諸
の國民の中より取りて納めたる金銀と共に是等をもエホバに納めたり
即ちエドムよりモアブよりアンモン
の子孫よりペリシテ人よりアマレクよりえたる物およびゾバの王レホブの子ハダゼルより得たる掠取物とともに
これを納めたり

二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

第九章

一 爰にダビデいひけるはサウルの家は遺存れる者尙あるや我ヨナタンの爲に其人に恩恵をほどこさ
二 んと
三 サウルの家は遺存れる者ありければかれをダビデの許に召きたるに王かれに
いひけるは汝はチバなるか彼いふ僕是なり
四 王いひけるは尙サウルの家は遺存れる者ありければかれをダビデの許に召きたるに王かれに
いひけるは汝はチバなるか彼いふ僕是なり
五 王いひけるは尙サウルの家は遺存れる者ありければかれをダビデの許に召きたるに王かれに
いひけるは汝はチバなるか彼いふ僕是なり
六 王いひけるは尙サウルの家は遺存れる者ありければかれをダビデの許に召きたるに王かれに
いひけるは汝はチバなるか彼いふ僕是なり
七 王いひけるは尙サウルの家は遺存れる者ありければかれをダビデの許に召きたるに王かれに
いひけるは汝はチバなるか彼いふ僕是なり
八 王いひけるは尙サウルの家は遺存れる者ありければかれをダビデの許に召きたるに王かれに
いひけるは汝はチバなるか彼いふ僕是なり
九 王いひけるは尙サウルの家は遺存れる者ありければかれをダビデの許に召きたるに王かれに
いひけるは汝はチバなるか彼いふ僕是なり
一〇 王いひけるは尙サウルの家は遺存れる者ありければかれをダビデの許に召きたるに王かれに
いひけるは汝はチバなるか彼いふ僕是なり

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

六 なり 且彼此事をなしたるに因りまた憐憫まざりしによりて其牝羔を四倍になして償ふべし
 ナタン、ダビデにいひけるは汝は其人なりイスラエルの神エホバ斯いひたまふ我汝に膏を沃いでイスラ
 エルの王となし我汝をサウルの手より救ひいだし 汝に汝の主人の家をあたへ汝の主人の諸妻を汝の懐に
 與へまたイスラエルとユダの家を汝に與へたり若し少からば我汝に種々の物を増くはへしならん 何ぞ汝エホ
 バの言を藐視して其目のまへに惡をなせしや汝刃劍をもてへテ人ウリヤを殺し其妻をとりて汝の妻となせり即ち
 アンモンの子孫の劍をもて彼を斬殺せり 汝我を輕んじてへテ人ウリヤの妻をとり汝の妻となしたるに因て劍
 何時までも汝の家を離るゝことなかるべし エホバ斯いひたまふ視よ我汝の家の中より汝の上に禍を起すべし
 我汝の諸妻を汝の目のまへに取て汝の隣人に與へん其人此日のまへにて汝の諸妻とともに寢ん 其は汝は密に
 事をなしたれど我はイスラエルの衆のまへと日のまへに此事をなすべければなりと ダビデ、ナタンにいふ
 我エホバに罪を犯したりナタン、ダビデにいひけるはエホバまた汝の罪を除きたまへり汝死さるべし されど
 汝此所行によりてエホバの敵に大なる罵る機會を與へたれば汝に生れし其子必ず死べしと かくてナタン
 其家にかへり

一六 爰にエホバ、ウリヤの妻がダビデに生る子を撃たまひければ痛く疾めり ダビデ其子のために神に乞求
 む即ちダビデ斷食して入り終夜地に臥したり ダビデの家の年寄等彼の傍に立ちてかれを地より起しめんと
 せしかども彼肯せず又かれらとともに食を爲ざりき 第七日に其子死りダビデの僕其子の死たることをダビデ
 に告ることを恐れたりかれらいひけるは子の尙生る間に我儕彼に語たりしに彼我儕の言を聽いれざりき如何ぞ

イ出二二・一 路一九 八 母前一五・九 一六・一七 二七 母後二四・一〇 伯 八・一三 米七・一八 母三四
 二八 母後一五・三二 一六 二二 母後二四・一〇 伯 七・一五 母三六 一 母後一三・三一
 母前一六・一三 母後一・一五 一五 母後二八・三〇 母後 一五・二四 天五・一四 母二二 七・一三 母三三・一
 三 母後一・一五 一〇 母後三三・一〇 一〇 母後三三・一〇 一〇 母後三三・一〇 一〇 母後三三・一〇 一〇
 三三 母後一・一五 一〇 母後三三・一〇 一〇 母後三三・一〇 一〇 母後三三・一〇 一〇 母後三三・一〇 一〇

彼に其子の死たるを告ぐべけんや彼害を爲んと 然にダビデ其僕の私語くを見てダビデ其子の死たるを曉れり
 ダビデ乃ち其僕に子は死たるやといひければかれら死りといふ 是においてダビデ地よりおきあがり身を洗ひ
 膏をぬり其衣服を更てエホバの家にいりて拜し自己の家に至り求めておのれのために食を備へしめて食へり
 僕等彼にいひけるは此の汝がなせる所は何事なるや汝子の生るあひだはこれのために斷食して哭きながら
 子の死る時に汝は起て食を爲すと ダビデいひけるは嬰孩の尙生るあひだにわが斷食して哭きたるは我誰かエ
 ホバの我を憐れみて此子を生しめたまふを知らんと思ひたればなり されど今死たれば我なんぞ斷食すべけんや
 我再びかれをかへらしむるを得んや我かれの所に往べけれど彼は我の所にかへらざるべし
 二四 ダビデ其妻バテシバを慰めかれの所にいりてかれとともに寢たりければ彼男子を生りダビデ其名をソロ
 モンと呼ぶエホバこれを愛したまひて 預言者ナタンを遣はし其名をエホバの故によりてエデデア(エホバの
 愛する者)と名けしめたまふ
 二六 爰にヨアブ、アンモンの子孫のラバを攻めて王城を取れり ヨアブ使者をダビデにつかはしていひける
 は我ラバを攻て水城を取れり されば汝今餘の民を集め斯城に向て陣どりて之を取れ恐らくは我此城を取て
 人我名をもて之を呼にいたらんと 是においてダビデ民を悉くあつめてラバにゆき攻て之を取り しかして
 二九 ダビデ、アンモン王の冕を其首より取はしたり其金の重は一タラントなりまた寶石を嵌たりこれをダビデの首
 に置ダビデ其邑の掠取物を甚だ多く持出せり かくてダビデ其中の民を將いだしてこれを鋸と鉄の千齒と鉄の
 斧にて斬りまた瓦陶の中を通行しめたり彼斯のごとくアンモンの子孫の凡ての城邑になせりしかしてダビデと